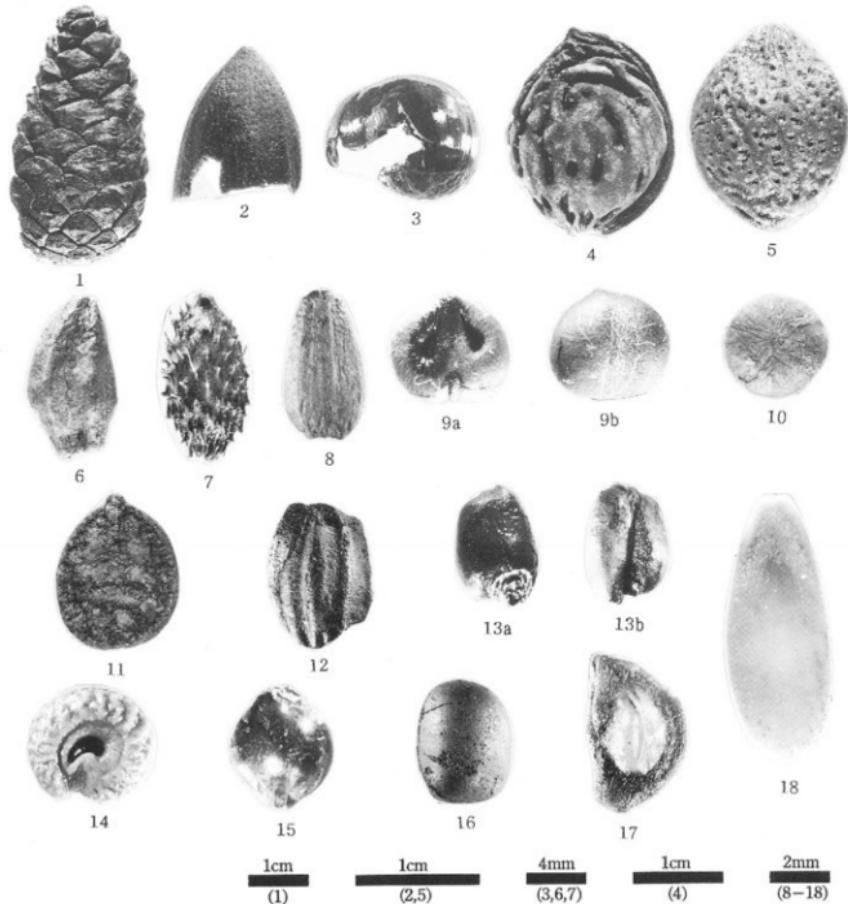


22. シャシャンボ (第33次 W6494)
23. タイミンタチバナ (第33次 W6464)
24. ハイノキ属ハイノキ節 (第33次 W6482)

a: 木口, b: 徴目, c: 枝目

fig. 464 上沢遺跡第33次調査出土木材樹種

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c



- 1.アカマツ（第33次；No.7）
 2.カヤ（第33次；No.8）
 3.コナラ属（第33次；No.8）
 4.モモ（第33次；No.1）
 5.ウメ（第33次；No.8）
 6.センダン（第33次；No.3）
 7.オナモミ属（第33次；No.3）
 8.クマシデ（第33次；No.6）
 9.ノブドウ（第33次；No.2）
 10.クマノミズキ（第33次；No.6）
 11.ガマズミ属（第33次；No.3）
 12.イネ（第33次；No.3）
 13.コムギ（第33次；No.3）
 14.アオツヅラフジ（第33次；No.3）
 15.アサ（第33次；No.6）
 16.マメ類（第33次；No.3）
 17.スズメウリ（第33次；No.3）
 18.メロン類（第33次；No.4）

fig. 465 上沢遺跡第33次調査出土種実遺体

かみ さわ 6. 上沢遺跡 第35次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、神戸市兵庫区上沢通8丁目付近から長田区五番町にかけて存在し、平成元年に初めて確認された遺跡である。

これまでに実施した調査の結果、縄文時代晚期から弥生時代前期（約2300年前）、古墳時代初頭（約1700年前頃）、古墳時代中頃（約1600年前）、飛鳥時代（約1300年前）、平安時代（約900年前）、中世（約800年前）の各時期の遺構・遺物を確認している。

今回の調査は、神戸市住宅局による五番町公園建設事業に伴って実施した。当調査については、既に平成12年度に『上沢遺跡発掘調査報告書－第35次調査－』を刊行している。よって本年報では調査の概要のみ示すに止め、詳細については、報告書を参照されたい。

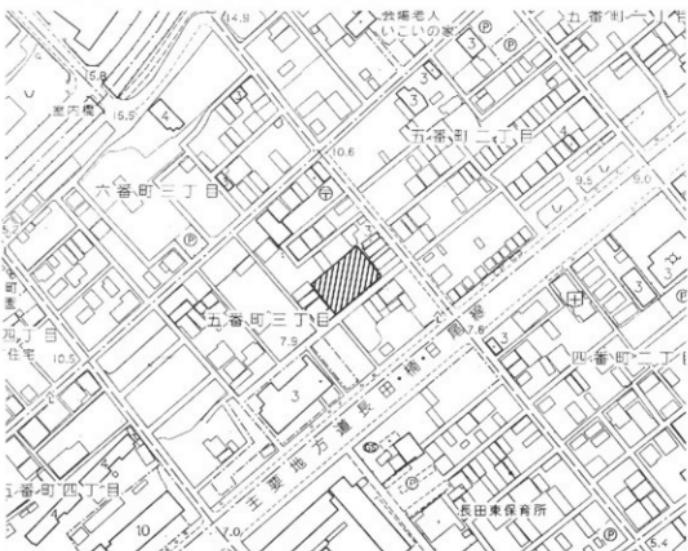


fig. 466
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査地は、現在考えられている上沢遺跡の範囲の中で、最も西寄りと考えられている地点に位置している。

調査は、大半の部分は、工事影響深度である標高約8.2m地点までに止めたが、一部、防火水槽設置箇所については、他より深く、水槽の工事影響深度まで調査を実施した。

工事影響深度内では1面の遺構面を確認した。工事影響深度以下については、さらに古い時期の遺構面が存在する可能性も考えられるが、今回の調査においては、下層において古い時期の遺構面は確認していない。

今回の調査地は、現況では北から南へ下がる緩やかな斜面地形となっている。これは、遺跡全体が六甲山系の麓に位置するためである。

基本層序

以前に存在した建物のコンクリート基礎の下層に、現代の田圃土と考えられる耕土が存在する。この田圃造成の際に、南側は北側より1段下がるように深く削られている。その結果、調査区南半部は、工事影響深度よりも下層まで削平されている。北半部では、耕土のすぐ下層（標高8.5m前後）で、暗褐色粘土（古墳時代中期遺物包含層）を確認した。

遺物包含層の下層（標高8.3m前後）に存在する、褐灰色シルト質粘土の上面で古墳時代中期（5世紀後半）頃の遺構を確認した。

遺構面以下の状況について一部トレンチ調査を実施して確認したが、標高7.1～8.0mまで淡黄灰色～灰色の砂が堆積している。これらの堆積層は検出状況から流水性の堆積物と考えられるが、土器がほとんど出土しないため堆積時期は不明である。以上から、遺構面より下層には標高7.1m前後までは埋蔵文化財は存在しないと判断し、調査を終了した。

検出遺構

今回の調査では、古墳時代中期の遺構面を確認し、竪穴住居1棟、溝11条、土坑14基、ピット21基などの遺構を検出した。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代中期（5世紀後半）の遺構をまとめて検出しているが、なかでも平面四角形の竪穴住居を検出した点が注目される。

上沢遺跡では、過去の調査でも多くの住居跡を検出しているが、最も多く検出しているのは奈良時代から平安時代のものである。そのほかでは、弥生時代前期のもの、古墳時代初頭のものなどもみられるが、今回のような古墳時代中期のものはあまり例がない。

上沢遺跡は、縄文時代晚期から弥生時代前期、庄内式期、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良時代から平安時代、中世の各時期にわたる複合遺跡であることが、これまでの調査で判明しているが、時期によって遺構が密に存在している地区があると考えられる。

過去の調査結果では、上沢遺跡全体の範囲のうち、東側では弥生時代前期、奈良時代から平安時代の遺構を多く検出しており、西側では古墳時代の遺物が多く出土している。このことから、古墳時代の集落は、上沢遺跡の範囲の中でもおそらく西寄りの位置に存在するものと考えられるが、今回の調査では、これまであまり明確ではなかった、上沢遺跡における古墳時代中期の集落の中の一部を確認したものと考えてよいだろう。

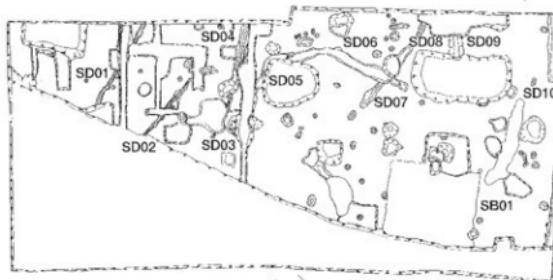


fig. 467
調査区平面図

0 10m

7. 茶臼山城址 第7次調査

1. はじめに

茶臼山城は、別名『上津城』とも呼ばれ、今からおよそ400年前の室町時代に、当地域を支配していた有馬氏の一族が築いたといわれており、1579（天正7）年に、織田信長の命令を受けた羽柴秀吉の中州地方攻略に際して攻撃を受け、落城したと伝えられている。

また、坊ヶ内子孝の著書『史塵』に記載中の「上津畠ノ庄茶臼山記」によると、当時の城主である一蓮坊祐之（井上源太夫）が城兵の助命と引き換えに切腹し、戦わずして城を羽柴秀吉方の仙石権兵衛に明け渡したと記されている。

茶臼山城は、長尾川と善入川の合流点南側の丘陵先端部に立地しており、長尾川流域の平野部が眺望できる良好な位置にある。長尾川を遡れば、吉川・東条方面に通じ、下れば有馬・三田方面の道につながる。また善入川を遡れば、大沢を経て淡河・三木方面の道に達するという、交通の要衝を見下ろす場所を選んで築造している。

当城址は、昭和45~46年にかけて実施した、北神地域埋蔵文化財分布調査により、その存在が明らかになった。当初は北神ニュータウン内遺跡No.20地点・No.21地点と呼称していたが、平成7年度より「茶臼山城址」と呼称している。



fig. 468
調査位置図
1 : 2,500

茶臼山城の構造 茶臼山城は、北側に派生する丘陵先端に築かれた標高約216～219mの平坦面である本丸、その本丸より一段下がった位置で本丸を取り巻くように築かれた、標高約209～210mの平坦面である二の丸、本丸・二の丸の南側に続く尾根の頂上部（標高約210～215m）に築かれた平坦面である南丸から構成されている。また南丸の南側の尾根上にも、出丸と推定される平坦面が存在している。

それぞれの郭（曲輪）と考えられる平坦面周辺には、堀切や土塁を造り、外敵の進入を困難にしている。

これまでの調査では、山城の範囲の確定と性格を明らかにするために実施した第1次調査において、本丸の頂部で基壇を持つ礎石建ち建物を検出し、また南丸周辺で土塁・堀切等を確認した。南丸周辺とその南に続く尾根において実施した第2次調査では、南丸の南側の尾根上（出丸推定地）で、ピット・土坑を検出した。また、この出丸と南丸を結ぶ尾根筋で、土橋状遺構を確認した。第3次調査は、出丸と南丸を結ぶ土橋状遺構周辺の発掘調査及び出丸周辺の尾根の試掘調査を実施した。南丸周辺及び二ノ丸周辺で実施した第4次調査では、南丸の頂部の平坦面で掘立柱建物（2間×2間）、土坑を検出し、南丸と本丸をつなぐ尾根で腰曲輪を検出した。また、二ノ丸周辺では、2ヶ所で堀切を検出した。二ノ丸から本丸へ登る階段設置予定部分について実施した第5次調査では、遺構は検出していないが、焼けた石材・陶器・土師器・鉄釘・鉄片等の遺物が出土した。二ノ丸周辺で実施した第6次調査では、5ヶ所で堀切を検出した。

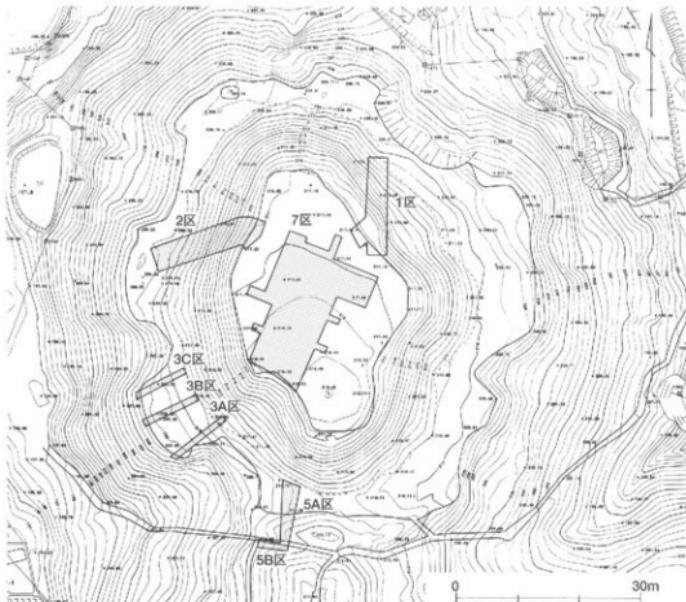


fig. 469
調査区位置図

2. 調査の概要 今回の調査は、北神戸第2地区土地区画整備事業区域内における茶臼山緑地整備工事に伴い、主として工事影響範囲部分について、発掘調査を実施した。

調査は、1区及び2区より開始した。表土、盛土、流土等を掘り下げて、黄灰色軟岩又は黄褐色軟岩（地山層）上面で、遺構確認作業を実施した。

当初は1～7区の調査区を設定して調査を実施する予定であったが、4・6区は急斜面地で、土砂の流出によって著しく旧地形が失われており、遺構・遺物が存在する可能性は極めて少ないと考えられるため、調査を実施しなかった。

検出遺構 検出遺構は、7区で土坑1基を検出したほか、堀切を、2区で1ヶ所、3区で3ヶ所、5区で1ヶ所検出している。また、7区で溝状遺構1条を検出し、5区で土壘を確認した。

1区及び2区は、階段設置予定部分である。階段部分については、第5次調査において3ヶ所について実施したが、斜面の傾斜が急勾配すぎることから、今回設計変更されることとなり、上記の2ヶ所について、調査を実施した。

1区 本丸の北東側斜面に設定した階段設置予定部分である。幅3.0m、全長15.8mの調査区で、調査の結果、遺構・遺物は検出しなかった。

2区 本丸の北西側斜面に設定した階段設置予定部分である。幅4.0m、全長17.0mの調査区で、調査区西端で堀切の東端（上端）を検出した。堀切の幅は2.5m以上で、深さ1.3m以上を測る。埋土内より遺物は出土していない。また、調査区中央付近の流土内より五輪塔の破片が1点出土している。

3区 本丸の南西側の二ノ丸部分に設定した調査区である。同地点で実施した第4・6次調査で堀を検出している。

幅1.0mの試掘トレンチを3ヶ所（3A区～3C区）に設定し、地山面まで掘削した。

3A区は全長12.4m、3B区は全長10.1m（うち6.6mについては、第6次調査5トレンチで調査済）、3C区は全長9.3mである。いずれのトレンチにおいても、堀切を検出している。堀切は、現状での上端部の幅が5.8～6.6m、底部の幅が2.0～2.2m、深さ0.5～2.0mを測る。埋土内より、土師器の小片が出土しているが、現段階では、詳細な時期は不明である。



fig. 470 1区全景



fig. 471 2区全景



fig. 472 3 B区全景



fig. 473 5区全景

5 区 二ノ丸の南西側にL字形に設定した調査区である。南北方向の全長9.8m部分を5 A区、東西方向の全長4.8m部分を5 B区と呼称する。

5 A区北側では、第4次調査で検出した堀切の続きを検出しており、堀の幅は3.0m以上、深さは現存高で1.0m以上を測る。また、南側では土壘の一部を確認した。断ち割り調査の結果、土壘の幅は、下端部で4.0~4.2m、高さ30~50cm以上を測る。土壘の盛土内からは、遺物は出土していない。

5 B区では、西側に向かって低くなる自然の傾斜面を検出した。遺物は出土していない。

7 区 本丸頂上部に設定した調査区である。切り株をすべて除去するに際して、遺構面までの深さが浅いため、東西約8.0~10.0m、南北約20.0mの平坦面部分（7 A区）については、全面調査を実施することとなった。遺構面が深くなる7 A区の北東側については、トレンチ（7 B~7 D区）を設定した。調査面積は、合計約90m²である。

7 A区における検出遺構には、土坑1基（SX01）、溝状遺構1条（SD01）、礎石10ヶ所（礎石1~10）のほか、ピット数基である。ただしピットの大半は、柱穴になるような明確な遺構ではなく、木の根による擾乱の可能性が考えられるものが多くみられる。

S X01 7 A区の中央西側で検出された梢円形の土坑で、東西1.5m×南北1.2m、深さ20~30cmを測る。底部付近から拳大から人頭大の角礫が數十個出土している。

出土遺物には時期を特定できるものは少ないが、近世以降のものである可能性が高い。

SD01 7 A区北端で検出した溝状遺構で、幅60~90cm、深さ20~30cmを測る。今回の調査では全長3.0mにわたって検出した。遺物が全く出土していないため、時期は不明である。

礎石1~10 いずれも一辺約30~50cm、厚さ10~15cm程度の偏平な角礫である。これらの礎石は、後世の植林等に際して、周辺の地形が著しく改変され、削平を受けているため、本来の位置からは移動しているものや失われているものが多く存在すると考えられる。今回検出された礎石から建物の規模を推定することは、現段階では極めて困難である。また、礎石及び建物の時期を特定できるような遺物も確認していない。

7 B区は、7 A区の北東部において、東西方向に設定した幅1.0m、全長2.0mのトレンチである。ピット1基を検出したが、遺物は出土していない。



fig. 474 7区全景



fig. 475 7区北部全景

7 C区は、7 B区の北側に直交して、南北方向に設定した幅1.0m、全長3.5mのトレーニチである。ピット2基を検出したが、遺物は出土していない。

7 D区は、7 C区の北側に直交して、東西方向に設定した幅1.0m、全長5.5mのトレーニチである。ピット1基を検出したが、遺物は出土していない。

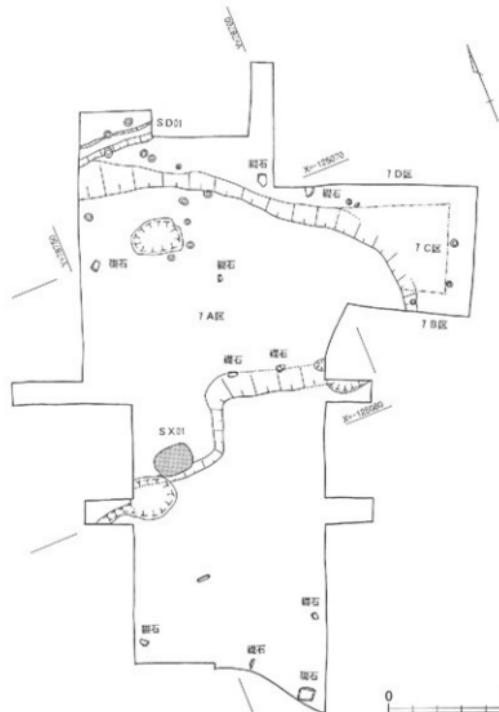
fig. 476
7区平面図



fig. 477 7区礎石



fig. 478 SX01

出土遺物 出土遺物は少量で、 28ℓ コンテナ 1 箱分にも満たない。また、細片が多く時期不明のものが大半であるが、おそらく中世以降のものと考えられる。なかでも江戸時代頃の遺物が比較的多く認められる。

3. まとめ 以上の調査の結果、本丸頂上部には、礎石をもつ建物が存在したことが、より確実となつたが、後世の著しい掘乱により削平を受けており、建物の規模は不明である。

また二ノ丸部分については、築造当時は、廓（曲輪）というよりはむしろ本丸部分の堀切であった可能性が極めて高い。

明確な時期を示す遺物がほとんど出土していないため、当城趾の築造時期や堀切の埋没時期（当城趾の廃絶時期）を特定することはできなかった。



fig. 479
茶臼山城近景

8. 木ノ元遺跡・西北遺跡・平井沢遺跡

1. はじめに

南僧尾地区は神戸市の北端部、淡河川の支流僧尾川の流域に拡がる斜面地に位置し、神戸市内でも棚田景観が特に良好に残されている地区である。

南僧尾地区では、県営淡河地区圃場整備事業に伴って、平成5・7年度に実施した試掘調査の結果埋蔵文化財の存在が確認された範囲について、平成10年度から発掘調査を実施してきている。

遺跡の周辺には勝雄遺跡・淡河中村遺跡・荻原遺跡など中世の集落遺跡が点在している。また近隣には中世寺院の石峯寺が現存している。この寺院の文書には南僧尾を含め、淡河地域の中世の集落についての記述があり、当時南僧尾内の各遺跡などのムラが石峯寺の勢力下にあったことが判明している。

なお南僧尾地区内の各遺跡については、平成11年度前半までの調査段階では全て「南僧尾遺跡」として取り扱っていた。しかしながら、『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』や下記報告書で示したように、入り組んだ谷地形の急斜面地に散在的に存在する遺跡の分布やこれまでの発掘調査の成果から、一つの遺跡として捉えることは適当ではないと判断し、それぞれ別の遺跡として扱うこととなった。

なお、平成11年度に調査を実施したもののうち、西北遺跡第1・2次調査及び平井沢遺跡第2次調査については、既に平成11年度に報告書『南僧尾』を刊行しており、本年報では調査の概要のみ示すこととする。上記調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig. 480
調査地位置図
1 : 10,000

2. 調査の概要 木ノ元遺跡第3次調査、西北遺跡第1・2次調査、平井沢遺跡第2次調査を実施した。
- 木ノ元遺跡 第1次調査地の西400mの地点において、土地改良事業に伴う僧尾川の河川改修事業に伴って実施したものである。平成5・7年度に実施した試掘調査結果に基づき、平成12年2月に河川改修影響範囲内において確認調査を実施した結果、遺構・遺物を確認した。今回の調査は、確認調査で遺構を確認した地区の一部について実施した。
- SK01 調査区の東南部で検出した南北3.6m、東西5.3m、深さ25cm前後の楕円形を呈する土坑で、中層部に炭化物・灰層がみられる。相当の削平を受けて断面形は浅い皿状を呈する。
- SX01 杭列を伴う落ち込みで、調査区南東隅で検出した。東側に落ちる谷部に土留めして水田造成を行った痕跡と思われる。15世紀前後の須恵器・土師器が出土している。
- 小 結 今回の調査地点の南400mの尾根上には真言宗の古刹石峯寺奥の院と伝える堂宇が存在し、関連する遺構の検出が予想されたが、土坑1基を検出したに止まった。しかしながら、遺物包含層から鎌倉時代から室町時代の遺物が比較的多量に出土しており、当該時期の集落が付近に存在することが予想される。

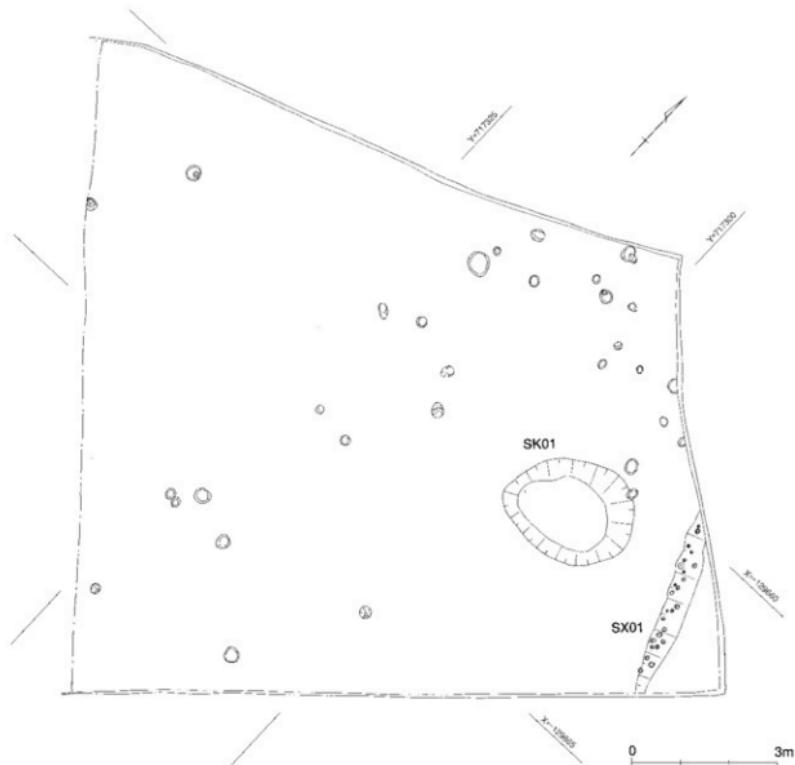


fig. 481 調査区平面図

西北遺跡

西北遺跡における調査は平成10年度から平成11年度にかけて実施した。

第1次

第1次調査地は、独立小丘陵の南側裾部とその西側の斜面上から地区中央の大規模な谷の谷頭、さらには谷の北側尾根上にかけての部分に立地する。

鎌倉時代の掘立柱建物1棟、安土桃山時代末頃の掘立柱建物6棟、柵列2条、水溜状遺構2基、土坑、溝、ピットなどの遺構を検出した。

第2次

調査地は第1次調査地の西に隣接しており、遺跡北方の谷の南側尾根上平坦面に立地している。溝3条、土坑5基、水溜状遺構1基、落ち込み6基を検出した。

小 結

西北遺跡の調査では、鎌倉時代の掘立柱建物1棟のほか、安土桃山時代末頃の掘立柱建物や水溜状遺構などの遺構を密集した状態で検出した。現段階では、南僧尾地区内の遺跡の中では、最も遺構・遺物の密度が高く、当該時期の集落域の様相の一端を示している。

安土桃山時代末頃の掘立柱建物は、一般的な建物か寺院や城館などの特殊な建物かについては不明であるが、他地域産の陶磁器が多く出土していることから、特殊な性格の建物である可能性も十分考えられる。調査区の北西に所在する、県指定文化財である南僧尾観音堂との関連も注目されるところである。



fig. 482 第2次調査区平面図

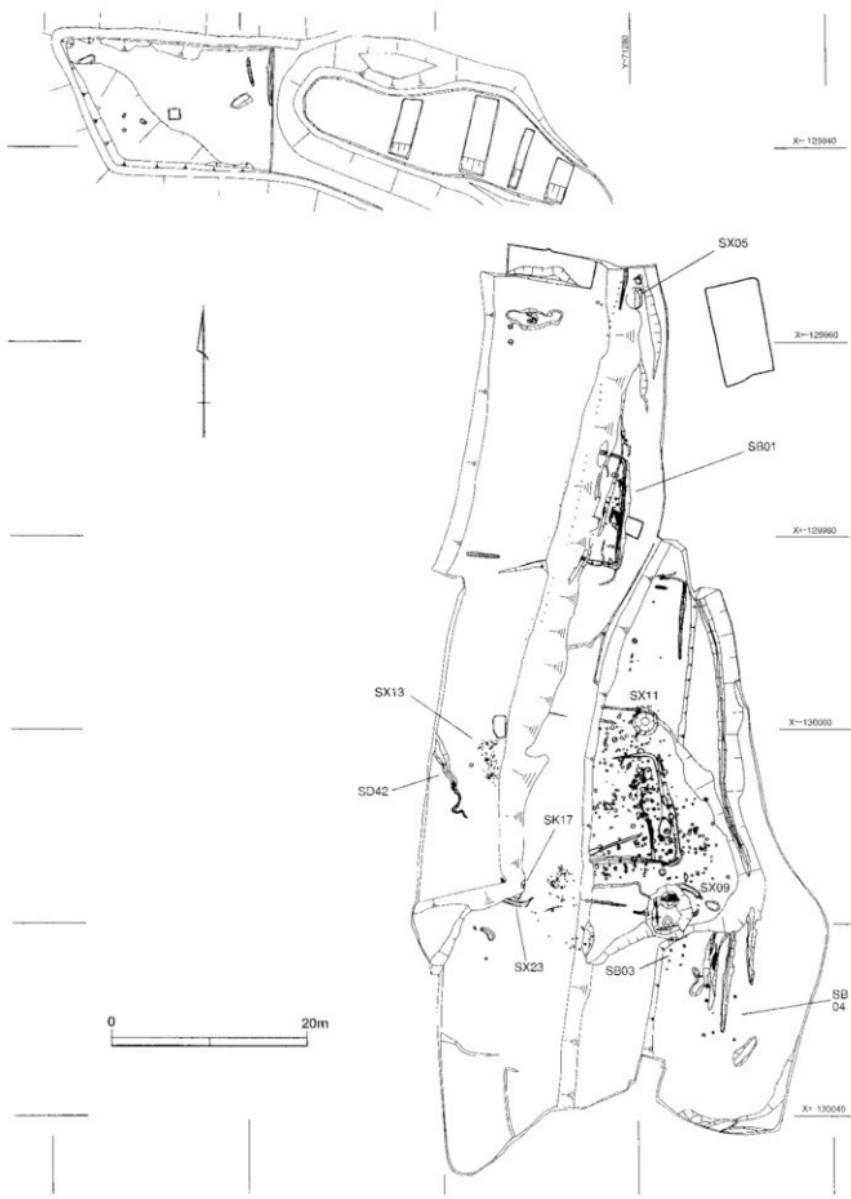


fig. 483 第1次調査区平面図



fig. 484 第1次調査区全景



fig. 485 第2次調査区全景

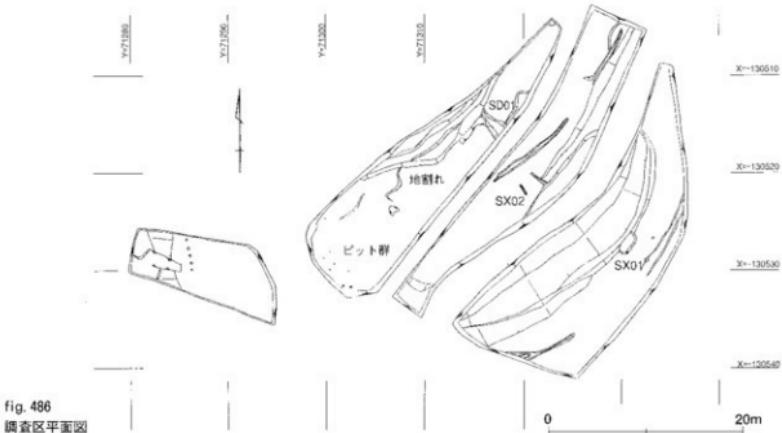


fig. 486
調査区平面図

平井沢遺跡 第2次 調査地は、僧尾川左岸の津本池西方の尾根筋から緩斜面地上に立地する。平成10年度に実施した確認調査の結果を受けて、工事影響範囲について本調査を実施した。

調査地の南側には南僧尾城が存在しており、調査前はその関連遺構が検出される可能性が考えられた。

土坑1基、溝1条、ピットなどの遺構を検出したほか、地割れ跡も検出した。

小 結

今回の調査では、調査前に予想された南僧尾城に関連すると考えられる遺構は検出されなかった。全体的にみても遺構の密度が希薄である。その原因は、南僧尾一帯が神戸市内でも有数の地割れ地帯であることにあると考えられる。A区の落ち込み状地形、C区の地割れなどがその傍証になる。おそらく一部の遺構を残し、遺構面自体が地割れにより崩壊したものと考えられる。

今回は、量的には少ないものの、C区の地割れやピットから中世の土器が出土しており、また耕土中からも中世から近世の遺物が出土していることから、大半の遺構は当該時期に属するものと考えられる。

3. ま と め 今回の南僧尾地区内の各遺跡の調査では、西北遺跡を中心として遺構・遺物を検出した。最も遺構・遺物を多く検出した西北遺跡の調査では、安土桃山時代（16世紀後半）の遺構を密集した状態で確認できた。検出した遺構のうち、掘立柱建物は規模の面などから一般的な建物というよりは、寺院や城館などの特殊な性格の建物である可能性が考えられ、當時における当地域の状況を考える上で示唆的な遺構である。

また遺物も量的には少ないので、各地域産の陶磁器が出土するなど特徴的な様相を示している。これらの遺物から当該期の流通を直接的に把握することは困難であるが、神戸市内では当該期の遺物はあまり類例が多くなく、貴重な資料といえる。

今回の一連の調査では、西北遺跡以外にも、木ノ元遺跡や平井沢遺跡においても中世の遺構・遺物を確認しており、南僧尾地区内における中世から近世にかけての様相が次第に明らかになりつつある。このように今回の調査で得た成果は大きいといえよう。

4. 植生史関連調査

- はじめに 西北遺跡第1・2次調査と平井沢遺跡第2次調査（確認調査）では、中世から近世の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材、杭材等の建築・土木材や、漆椀など木製品が出土している。
- 本報告では、これらの木材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。
- I. 試料 試料は出土した木製品など34点で、各試料の詳細は樹種同定結果と共に表に記した。
- II. 方法 刺刀の刃を用いて木口（横断面）・枉目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。
- III. 結果 樹種同定結果を表に示す。西北遺跡第1次調査W6428は、道管が認められることから広葉樹であるが、保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹4種類（マツ属複維管束亞属・スギ・ヒノキ・ヒノキ属）、広葉樹4種類（ブナ属・リ・サカキ・サクラ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。
- ・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科
仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。
 - ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属
仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。
 - ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属
仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。
 - ・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科
仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～15細胞高。
 - 上記のヒノキあるいは同属のサワラと考えられるが、保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。
 - ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科
散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

西北遺跡および平井沢遺跡の樹種同定結果

調査次	登録番号	R番号	地 区	遺 物 名	層 位	時 期	樹 種
西北遺跡 1次	6410	343	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ属
	6411	344	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6412	345	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6413	346	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6414	347	2区	杭	S X09	16世紀後半	クリ
	6415	348	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6416	349	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6417	350	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6418	351	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6419	352	2区	丸材	S X09	16世紀後半	マツ属複管束亞属
	6420	356	2区	杭	S X09	16世紀後半	クリ
	6421	357	2区	杭	S X09	16世紀後半	スギ
	6422	358	2区	杭	S X09	16世紀後半	スギ
	6423	361	2区	杭	S X09	16世紀後半	サカキ
	6424	362	2区	杭	S X09	16世紀後半	ヒノキ
	6425	363	2区	杭	S X09	16世紀後半	サカキ
	6426	364	2区	杭	S X09	16世紀後半	サクラ属
	6427	365	2区	杭	S X09	16世紀後半	クリ
	6428	366	2区	丸材	S X09	16世紀後半	広葉樹
	6429	367	2区	丸材	S X09	16世紀後半	マツ属複管束亞属
	6430	287	2区	へら(板)	S X11	16世紀後半	スギ
	6431	300	2区	椎木(板)	S X11	16世紀後半	クリ
	6432	353	2区	端部加工木材	S X09	16世紀後半	クリ
	6433	368	2区	柱材	S B67-P01埋土	16世紀後半	マツ属複管束亞属
	6434	387	2区	柱材?	S P221	16世紀後半	マツ属複管束亞属
平井沢遺跡 2次	1	A-1 Tr.更端		油漆漆	水田水層	近世?	ブナ属
	2			油物底版?	池底灰褐色粘土	中世	ヒノキ
	3	E-3 Tr.		油物底版?	池底灰褐色粘土	中世	マツ属複管束亞属
	6435	89-1	8区	板材	S D06	中世後半	マツ属複管束亞属
	6436	81	8区	板材	S K03	中世後半	マツ属複管束亞属
	6437	82	8区	板材	S X02	中世後半	ヒノキ
	6438	83	8区	柱材	S P74	中世後半	マツ属複管束亞属
西北遺跡 2次	6439	84	8区	杭	S X03	16世紀後半	マツ属複管束亞属
	6440	85	8区	杭	S X03	16世紀後半	マツ属複管束亞属
	6441	80-2	8区	板材	S D06	中世後半	マツ属複管束亞属

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

IV. 考察

試料は、杭、柱、板材、丸材、曲物底板、漆器碗など分類される。杭材は、針葉樹のヒノキと複管束亞属が多く使用され、他に針葉樹のスギ、広葉樹のクリ、サカキ、サクラ属が認められる。遺構別に見ると、S X03の2点に認められた複管束亞属は、S X09では丸材には認められるものの、杭材には全く認められなかった。この結果から、遺構によって用材選択が異なっていた可能性があるが、点数が少ないため詳細は不明である。杭材は、使用されている種類数が多いことを考慮すれば、特定の木材が選択されたのではなく、遺跡周辺に生育していた種類、加工時の余材、廃材の転用など、入手できる様々な木材が利用された可能性がある。

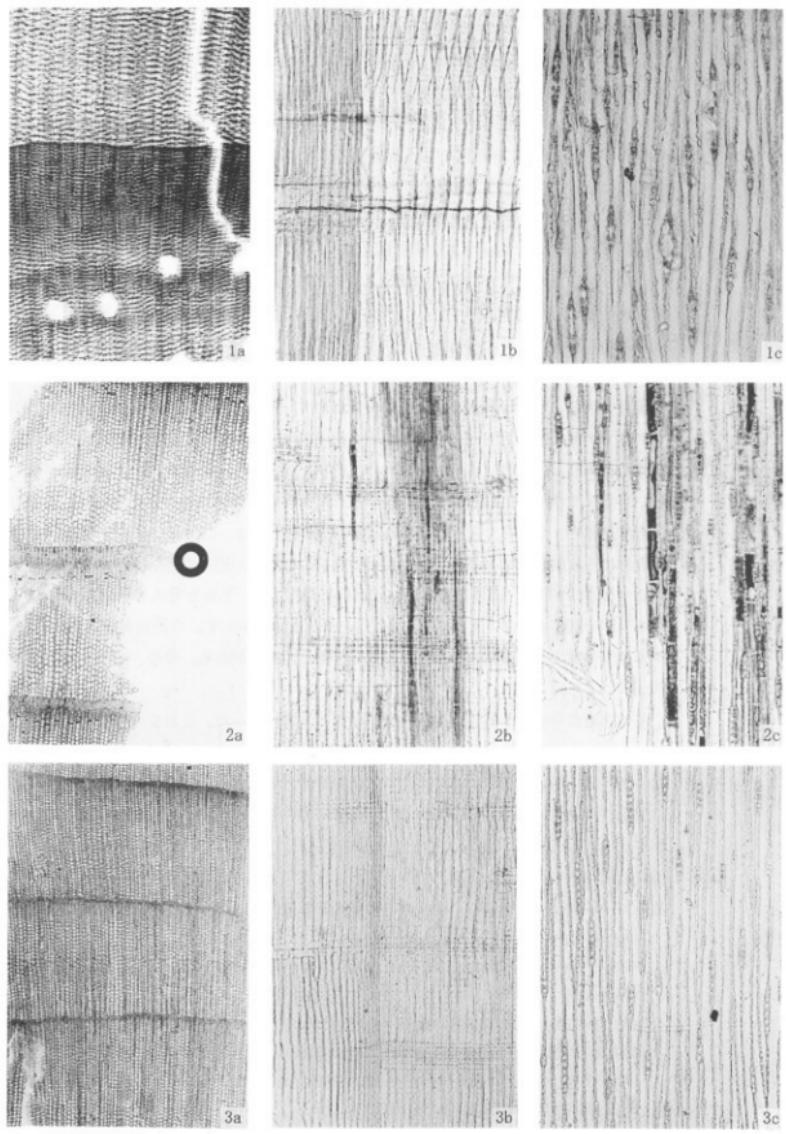
柱材は、W6433とW6438の2点がいずれも複維管束亞属であった。W6434は柱？とされているが、複維管束亞属であることから、他の2点と同様に柱材の可能性が高い。複維管束亞属の木材は、強度が比較的高い。また、松脂を多く含むために、耐水性もある。そのため、建築・土木材として有用材であり、遺跡から多くの報告例がある（島地・伊東、1988；伊東、1991）。本遺跡でも、複維管束亞属の材質を考慮した上で、柱材として利用していたことが推定される。ところで、大阪府能勢町の17世紀初頭に建築された民家の調査では、複維管束亞属が多くの部材に認められているが、柱はほとんどがクリで、複維管束亞属は1点のみであった（布谷・中尾、1986）。この結果から、地域によって用材選択が異なっていた可能性がある。地域によって種類構成が異なる背景には、地域による植生や禁忌の違い等が指摘されている（布谷・中尾、1986）。また、建物の形態や用途などによる違いの可能性も考えられる。

木製品では、漆椀がブナ属とクリに同定されている。いずれも漆椀の木地として一般的な種類であり、多くの遺跡で出土例が報告されている（島地・伊東、1988；伊東、1990）。ブナ属とクリを比較すると、材質や木材組織が異なっている。民俗事例では、クリは堅硬で韌性があり、薄手物に適するとされる（橋本、1979）。一方、ブナ属は、乾燥が難しく狂いが生じやすいが、簡単に入手するために使用量が多いとされる。漆椀は、漆塗りの丁寧な上品と、簡単な下品とがある（北野、1990）。また、このようなランクは、木地の木取りにも反映されており、上製の椀には亀裂の生じない堅木の芯抜きが利用されたとされる（橋本、1979）。遺跡から出土した漆器の調査では、下品と考えられる試料にはトチノキやブナ属の椀が多く見られる（北野、1999）。したがって、今回の漆器についても、クリとブナ属では、漆器のランクが異なっていた可能性がある。今後、漆の塗膜断面の観察についても行いたい。

曲物底板の可能性がある板材は、針葉樹のヒノキであった。これまでの調査でも、ヒノキは曲物に多数確認されており、今回の製品が曲物底板としても矛盾しない。ヒノキが曲物として多く利用されている背景には、材が緻密で弾力があること、割裂性が大きく板状の加工が容易であること、香気があって虫害に強いこと、耐水性・耐湿性に優れること等が挙げられる（成田、1995, 1996）。へらや板材についても、基本的には板状の加工が容易な針葉樹材を利用している。樹種の違いは、利用目的の違いなどを示している可能性があるが、詳細は不明である。今後さらに資料を蓄積したい。

引用文献

- 橋本鉄男（1979）『ろくろ』p.444. 法政大学出版局.
- 伊東隆夫（1990）『日本の遺跡から出土した木材とその樹種Ⅱ』木材研究・資料, 26. p.91-189. 京都大学木材研究所.
- 北野信彦（1990）「近世出土漆器に関する一調査法」『考古学ジャーナル』322. p.24-28.
- 北野信彦（1999）「生産技術山からみた江戸遺跡出土漆器の生産・流通・消費」『江戸遺跡研究会第12回大会江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－（発表要旨）』. p. 5-24.
- 成田壽一郎（1995）『木工指物』p.174. 理工学社.
- 成田壽一郎（1996）『曲物・蘿物』p.205. 理工学社.
- 布谷知大・中尾七重（1986）『民家の構造材の樹種』『大阪市立自然史博物館研究報告』40. p.21-30.
- 島地謙・伊東隆夫編（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』p.296. 雄山閣.



1.マツ属複管束型 (W6429)

2.スギ (W6421)

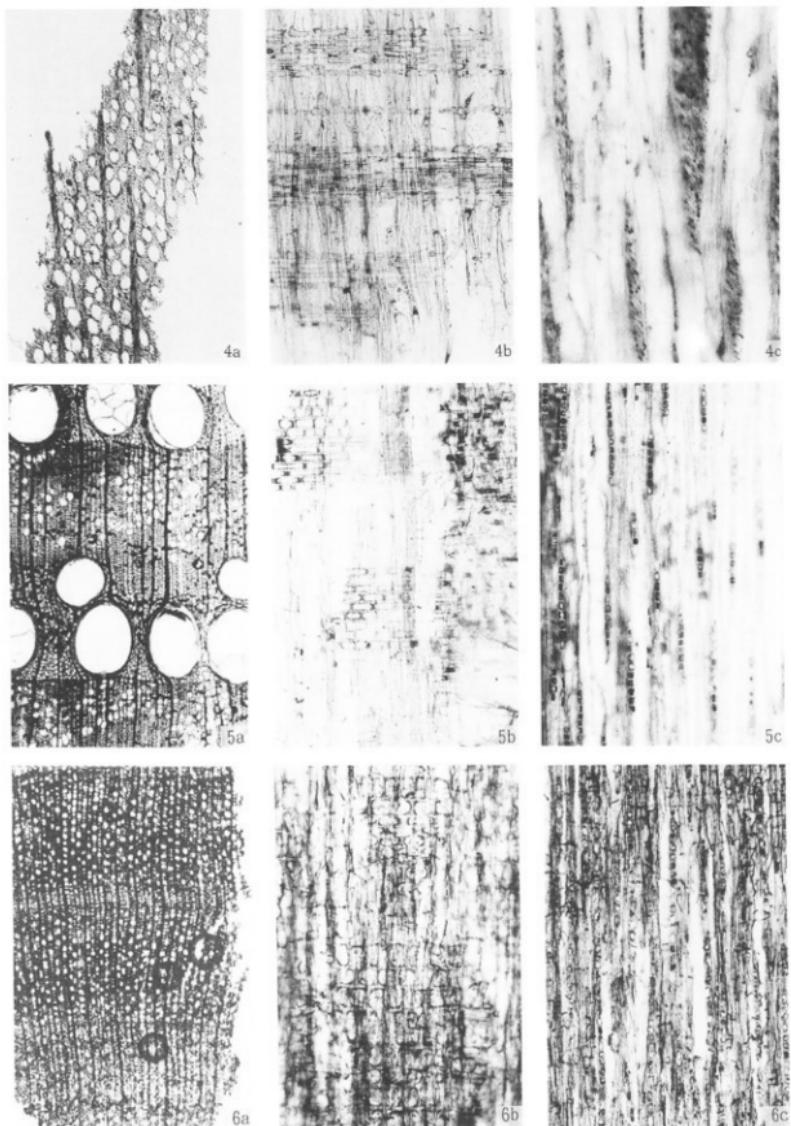
3.ヒノキ (W6413)

a:木口, b:径目, c:板目

fig. 487 西北遺跡第1次調査出土木材樹種

200 μ m : a

200 μ m : b, c



4.ブナ属 (R1)
5.クリ (W6431)
6.サカキ (W6423)
a:木口, b:粧目, c:板目

fig. 488 西北遺跡第1次調査・平井沢遺跡第2次調査出土木材樹種



7. サクラ属 (W6426)
a: 木口, b: 横目, c: 板目

200 μm : a,
200 μm : b, c

fig. 489 西北遺跡第1次調査出土木材樹種

おうごきづ 9. 淡河木津遺跡 第2次調査

1. はじめに 淡河木津遺跡は、木津地区の圃場整備事業に伴う試掘調査で発見された遺跡であり、淡河川左岸の標高約150mに立地している。

第1次調査では、鎌倉時代の掘立柱建物等に伴う土坑墓や園池遺構、江戸時代の鍛冶炉等を検出しており、鎌倉時代から江戸時代の集落跡の存在が明らかになった。

今回の調査地は、この園池遺構の西隣に接した地区である。圃場整備事業に伴う道路建設事業に伴い調査を実施した。



fig. 490
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 調査区は基本的に削平を受けており、遺構の検出状況は悪く、希薄である。

検出遺構 堀立柱建物 1棟を含む柱穴等のほか、近世の石組み井戸 1基を検出した。

S E01 堀形の幅約1.6m、深さ約1.65mを測る石組みの井戸である。石組みは幅約1.0m、深さ約1.4mを測り、石組み底部をさらに幅約50cm、深さ約20cmに掘り窪めている。近世の陶磁器片が出土している。

S B01 東西2間以上×南北1間の堀立柱建物である。建物方位は真北から76度東へ振る。柱間は東西2m、南北4mを測る。柱穴の大半は、径約40~50cm、深さ約14~20cmを測る。中世土師器の細片がわずかに出土しているが、詳細な時期は不明である。

ピット 本来は堀立柱建物を構成していたと予想できるが、遺存状況が悪く確認できない。良好な状態で検出したピットは深さ約50~60cmを測り、中世前期の土師器片が出土している。

3. まとめ 今回の調査区は多くの部分が削平されており、遺構の遺存状況も良好ではない。中世の遺構は堀立柱建物を1棟確認している。他にもピットを検出しているが、建物としてのまとまりは確認できなかった。

堀立柱建物の時期は、柱穴内の遺物からは中世としか判断できない。ただし他の残存状態の良好な柱穴からは中世前期の土師器片も出土している。堀立柱建物の時期も中世前期に遡る可能性が高い。

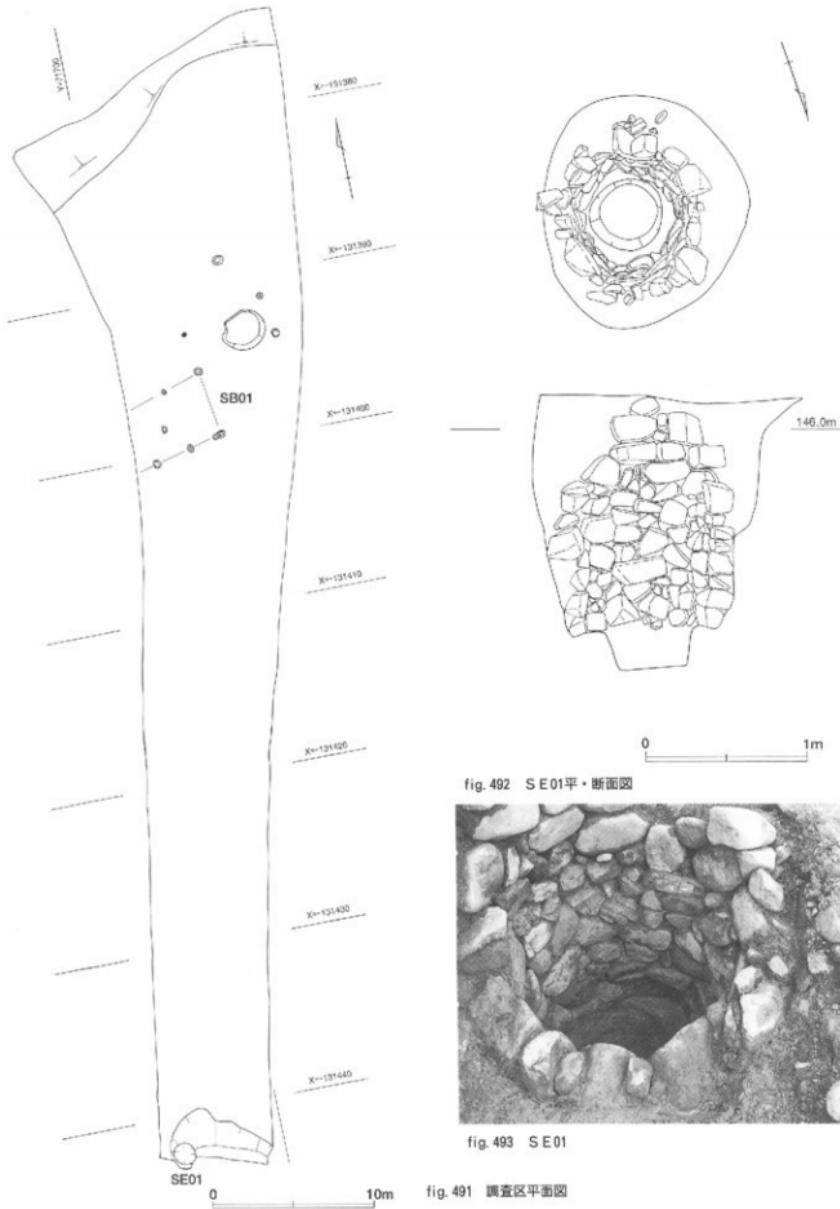


fig. 492 SE01平・断面図



fig. 493 SE01

fig. 491 調査区平面図

はぎ わら 10. 萩原 遺跡 第10 次調査

1. はじめに

萩原遺跡の調査は、昭和54年に圃場整備事業に伴って試掘調査を実施し、一部で本格的な調査を実施したのが最初である。

昭和54年の調査では、平安時代末から鎌倉時代の初頭と考えられる掘立柱建物を検出している。平成2年よりさらに広域な圃場整備事業が計画され、平成2年から平成4年まで試掘調査を実施した。

その後平成8年まで8回にわたって淡河萩原発掘調査団による発掘調査が実施された。調査の結果、绳文時代後期、古墳時代後期、平安時代末期から鎌倉時代の遺構が検出され、遺跡の中心的な時期は、平安時代末期から鎌倉時代と考えられる。

このように平安時代末期から鎌倉時代全般にわたって営まれた集落は、遺跡の淡河川対岸丘陵部に築かれた平山城である萩原城、または淡河庄地頭淡河氏に関連する集落と考えられている。

今回の調査地は、現在は付け替えられて調査地の東で淡河川に合流している北谷川左岸の段丘端に位置し、淡河川対岸に萩原城跡、西に遠く淡河城を望むことができる。

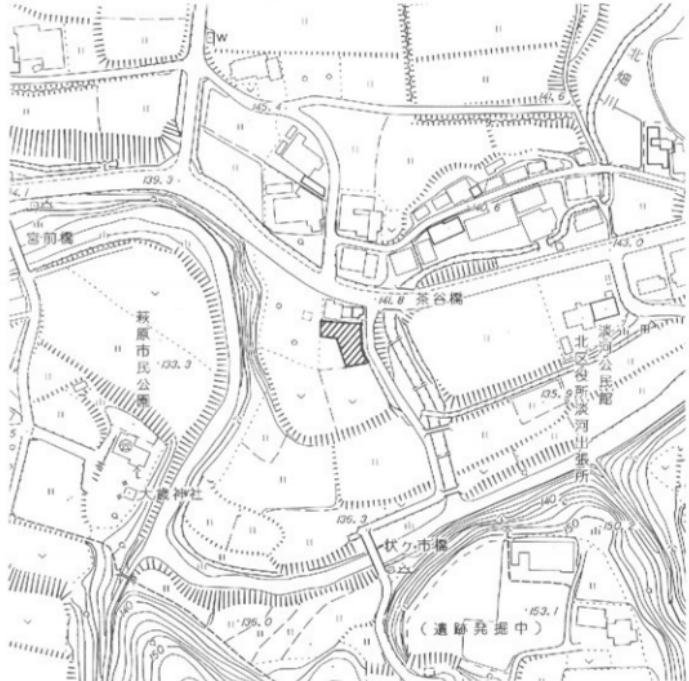


fig. 494
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 調査は、当初農地進入用道路の切り下げ部幅5m、長さ38mの範囲について実施したが、調査区南部で遺構を集中して検出したため、一部で西側に約5m拡張して遺構の性格を明らかにする調査を実施した。

検出遺構 河道状落ち込み1ヶ所、土坑2基、溝2条、落ち込み3ヶ所、ピット多数を検出した。

河 道 調査区北西部で検出した。幅9m、深さ40cmを測り、南西方向に土石流が流れ込んだ形跡を検出し、上層の暗褐色土内から土師器細片が出土している。流路の方向から判断して、北谷川の旧流路と考えられる。

S K01 調査区東壁沿いで検出した。土坑の東側は調査区外であるが、推定直径1.9m、深さ20cmの断面皿状の土坑である。土師器細片が出土している。

S K02 東半分をS K01に切られる土坑で、長径50cm、短径40cm、深さ20cmを測り、平面径は梢円形である。遺物は出土していない。

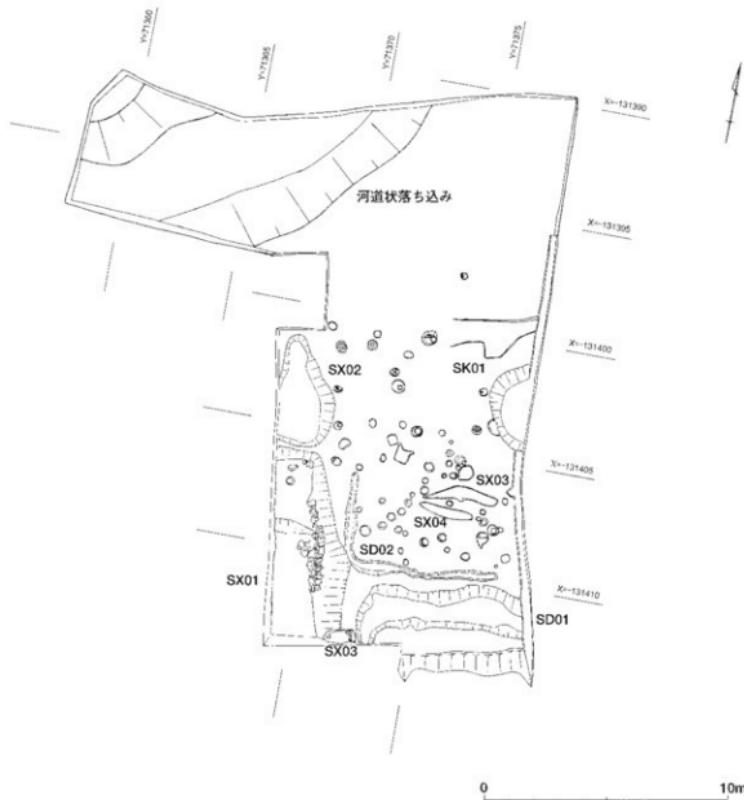


fig. 495 調査区平面図

- S D01 調査区南端で検出した、幅0.8~1.0m、深さ22cm前後の断面U字形の溝である。西側でやや浅くなり南に屈曲する。埋土上層からは中世の須恵器・土師器片が比較的まとまって出土した。
- S D02 S D01の北側で検出したL字形の溝である。幅18cm、深さ6cm前後を測る断面U字形の溝で、西側でほぼ直角に北側に屈曲する。溝の北側及び東側にはピット・柱穴の集中がみられ、掘立柱建に伴う雨落ち溝とも考えられる。土師器皿・須恵器片が出土している。
- S X01 調査区西壁沿いで検出した長さ8.0m以上、幅3.0m以上、深さ90cmの長方形の落ち込みで、底部10cm前後に灰層の堆積がみられる。須恵器捏鉢・土師器壺が出土した。東側には掘り込んだのちに人頭大の川原石が積み込まれ、石材の裏側に埋め土が充填される。
- S X02 S X01の北に続くかたちで検出した、南北4.8m、東西2.5m、深さ20cm前後の平面形なすび形の落ち込みで、底面は南北に緩やかに傾斜し立ち上がる。遺物は出土していない。
- S X03 調査区南壁沿いで検出した平面形が長楕円形の土坑状落ち込みで、S X01に西側を切られる。規模は、長径60cm、短径30cm以上、深さ60cmである。遺構上面には人頭大の川原石がみられる。須恵器・土師器片が出土している。

3. ま と め 今回の調査地は、萩原城の北側向かいにあたり、比較的広い河岸段丘面が展開する地域に位置する。検出した主要遺構は性格不明の落ち込み3ヶ所、建物に伴う雨落ち溝である。S X01とS X02は主軸が同一で、連続する水溜状遺構であると考えられる。この水溜状遺構は、堆積土下層から出土した遺物から鎌倉時代初頭を降らない時期が想定され、最終堆積層からは南北朝時代前後の須恵器・土師器が出土している点から、相当長期にわたって使用されていたと考えられる。S D02の北側には柱穴と考えられるピットが集中しており、



fig. 496
調査区全景

建物検出に努めたがまとまりは認められなかった。後世相当の削平を受けて壊滅した可能性がある。建物の時期は水溜状遺構に相前後する時期と考えられる。



fig. 497
調査区南部全景



fig. 498
S X01・02

11. 勝雄遺跡 第6次-1・2調査

1. はじめに

勝雄遺跡は、美嚢川の支流である淡河川の河岸段丘上に立地する弥生時代後期から近世の複合遺跡である。

今回の調査は土地改良事業に伴うもので、農道及び排水路の設置部分において実施したものである。調査区は淡河川を挟んで両岸に位置しており、右岸を西地区、左岸を東地区として調査を実施した。



fig. 499 調査位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

西地区

農道及び排水路の設置部分の調査区である。調査地の北側をA区、南側をB区として調査を実施した。

基本層序

A区とB区とでは層位の様相が少し異なる。A区は現水田面の下層に20~40cmの旧耕土が存在し、その下層が中世の遺物包含層である濃褐色粘砂土で、その下層上面が遺構面となる。この遺構面の基盤層は疊混りの黄色系の粘質土で、河岸段丘の段丘面にあたる部分である。B区は現水田面や過去の水田開発等によって、遺構面にあたる段丘面が著しく削平されており、遺物包含層も存在しない。A区は淡河川に向かって遺構面がやや下がり傾斜になっているが、B区は淡河川に近いために、かなりの急傾斜となっており、B区の南端ではその傾斜面がみられる。遺構面までの深さは、A区で現水田面下0.5~1.0m、B区の南端部の最深部で現水田面下1.4mを測る。

検出遺構

A区の北半部で集中して、溝、落ち込みなどの遺構を検出している。南半部は淡河川に向かって遺構面の傾斜が急となっており、また遺構が極端に少なくなることから、集落の末端部分に位置するものと推定できる。ピットは規則的に並ぶものもあるが、掘立柱建物としてのまとめりは、調査区内では確認していない。遺構の時期は、出土遺物から判断して、大半が12世紀後半から13世紀前半に属するものと考えられる。

出土遺物

遺物は土器が大半で、遺物包含層からの出土が多い。遺構からの出土はあまり多くはないが、A区の中央部で検出したSD03からは小片ばかりではあるものの、土器がまとまって出土している。遺構内からの出土遺物は、先述したように概ね12世紀後半から13世紀前半に属すると考えられる。遺物包含層からは、12・13世紀のもの以外に、11世紀代に属するものや、弥生時代後期後半から庄内式期のものも出土している。



fig. 500
A・B区全景

東地区

排水路及び排水路に取りつく小排水路の設置部分の調査区である。1~14、A~Fの計20ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。

同地区は、段丘の発達している淡河川の右岸地区（西地区）に比べて地勢があまり良くなく、平地の大半が淡河川の氾濫原にあたり、そのすぐ背後は山間部に入るため段丘部分が少ない。設定したトレンチのうち、13・14トレンチが段丘上、11、12、A~Fトレンチが段丘斜面または丘陵斜面にあたるほかは、氾濫原の中に位置している。

基本層序

西地区で確認された遺物包含層に相当する層位は存在しない。段丘上にあたる13・14トレンチにおいては遺構面を覆っているのは旧耕土で、11、12、A~Fトレンチの段丘斜面や丘陵斜面を覆っているのは流土である。1~10トレンチについては、旧耕土の下層が河道状あるいは湿地状の堆積層で、居住域に適する環境であったとは考えがたいが、土砂の堆積によって形成された微高地上に遺構が存在する地区（7トレンチ）も確認している。遺構面までの深さは、流土等の堆積状況や整地層・盛土層の有無などで場所によって差異がみられるが、7・13トレンチで現地表下30~50cmを測る。

検出遺構

遺構の存在が確認できた調査区は、3、7、13トレンチのみである。検出した遺構は、ピット、溝、土坑などで、そのほか3トレンチで半割状の樹木を利用した道板状の施設を確認した。遺構の時期については、出土遺物も少なく特定はできないが、概ね中世の範囲内と考えられる。3・13トレンチについては、トレンチの拡張を行い、遺構の確認調査を実施した。拡張区の詳細については、以下に記す。



fig. 501 1トレンチ全景



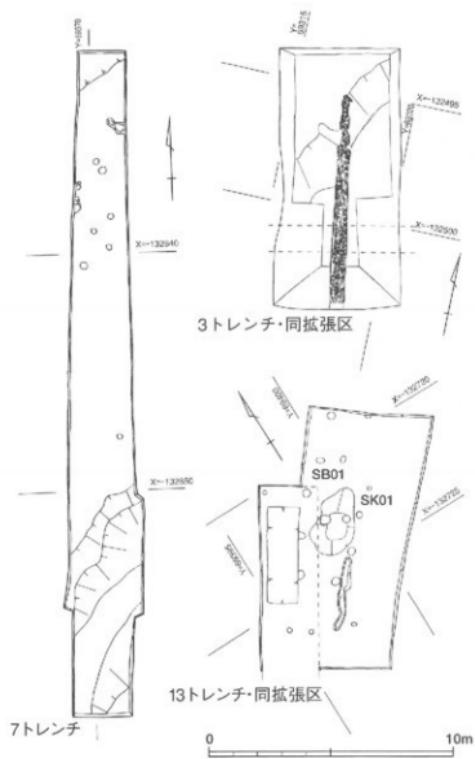
fig. 502 5トレンチ全景



fig. 503 7トレンチ全景



fig. 504 11トレンチ全景



3 レンチ 拡張区 淡河川の氾濫原内に位置する部分と考えられる。現地表下40~50cm程度までは旧耕土にあたるが、その下層は概ね湿地状堆積層で、現地表下1.1~1.5m付近でその下層が砂礫状の河道状堆積層となる。層序からみると河道から水流のほとんどない湿地へと変遷していったことが窺える。

3 レンチの調査において、幅約60cm、厚さ約30cmを測る半割状の樹木を検出し、その形状等の確認のため拡張区を設定し調査を実施した。しかしながら、調査地の南側が現況道路にあたるため、その連続部分が検出できなかった。また、北側に行くほど樹木自身の遺存状況が悪く、先細りするようなかたちで途切れしており、全体の形状や規模は把握できなかった。検出した部分での規模は、長さ約8.5m、最大幅約65cm、最大厚約30cmを測る。形状はほぼ直線で、断面形が上部がやや窪む半円状を呈する。上部（上面）は平らに成形されているように見受けられるが、磨滅が著しく加工痕は不明瞭である。用途については断定は難しいが、湿地状堆積層にほぼ水平に設置されていることから、湿地を歩行するための道板状の施設と考えるのが現在のところ妥当であろう。時期についても特定はできないが、樹木を包含する湿地状堆積層から中世の遺物が若干出土しており、時期比定の手がかりになるものと考えられる。

13 レンチ 拡張区 低位段丘上に位置する調査区で、現地表下40~50cm程度で遺構面に達し、遺構面の基盤層にあたる層位も比較的硬質の礫混りの砂質土である。13 レンチの調査において、埋土に焼土を含む土坑（S K01）の一部分とその縁辺に3基の連続するピットを検出した。これらの遺構の全容を確認するために、拡張区を設定し調査を実施した。

S K01 長径2.8m、短径1.8m、深さ40cmの平面形が不整な楕円形のもので、底付近に2基のピットを有する。埋土には焼土や炭などが含み、何らかの焼成行為が行われていた可能性が高い。そして、縁辺で当初検出された3基のピットを含め、土坑を囲うようなかたちでピットが確認され、覆屋？（S B01）のようなものが存在した可能性も考えられる。

出土遺物は少なく、土坑内より中世のものと考えられる土器の小片が確認された程度である。よって詳細な時期比定は困難であるが、周辺調査の状況から中世の範疇に入るものと推定される。



fig. 508 7 レンチ全景



fig. 509 13 レンチ・同拡張部全景

出土遺物

今回の調査では遺物包含層の存在する調査区がなく、遺構内からの出土も少ない。出土遺物の大半が旧耕土や流土、あるいは河道・湿地状堆積層からの出土である。量的にも西地区に比べてかなり少ない。時期としてはやはり中世のものが多いが、流土からは奈良時代・平安時代のものが、また、3・5トレンチの河道状堆積層やBトレンチの流土層からは弥生時代から古墳時代の遺物が数点出土している。遺物は土器の破片がほとんどである。

3. まとめ

今回の調査では、西地区（右岸）では段丘上、東地区（左岸）ではわずかに存在する段丘部分や氾濫原中の微高地上で遺構を確認した。

西地区にあたる淡河川右岸地域は、河岸段丘が発達しており、段丘面も広いため、集落の立地には好条件である。一方東地区にあたる左岸地域は、河岸に山間部が迫っており、段丘部分がほとんど存在せず、地勢的にはあまり良くない。右岸地域は過去の調査においても古墳時代から中世の集落が確認されており、集落が恒常的に存在していたことが窺えるが、左岸地域においては試掘調査以外での発掘調査件数も少なく、遺構が確認されたことは新たな知見である。

勝雄遺跡は淡河川を挟んだ両岸に集落が存在する遺跡である。立地上、段丘の発達している右岸地域を主体に集落が形成されることを否めないが、左岸地域においてもわずかな段丘上や氾濫原中の微高地上にその痕跡はみられる。3、7、13トレンチで確認された遺構は概ね中世に属するものと考えられ、この時期に地勢がほぼ安定したことを示す成果とも受け取れるが、勝雄地区を含めた淡河地域は中世において集落が増大することもあり、東地区（左岸地域）の集落形成についてはさらなる検討が必要である。しかしながら、流土層や河道状堆積層などから弥生時代から奈良時代・平安時代に属する遺物が確認されており、狭隘な段丘上あるいは丘陵上に集落が細々と営まれていた可能性が高い。また、13トレンチで検出された土坑（S B01）と覆屋と考えられるピット列（S B01）は、何らかの生産行為に伴う遺構の可能性が高く、中世の段階には東地区に社会的地位を保持した集落の存在がうかがえる成果といえよう。



fig. 510
勝雄遺跡遠景

4. 植生史関連調査

はじめに 勝雄遺跡では、飛鳥時代、平安時代前半、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物跡、溝跡などの遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材、礎板などの建築部材や、曲物底板、栓、漆器等の木製品が出土している。

本報告では、これらの木材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

I. 試料 試料は、第2・4・5・6次の調査で出土した柱材、礎板、曲物底板、漆器片など18点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

II. 方法 刺刀の刃を用いて木口（横断面）・杼目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

III. 結果 樹種同定結果を表に示す。第5次調査のW6402とW6409は、それぞれ観察できた組織から、W6402が針葉樹、W6409が環孔材の組織を有する広葉樹材であることは確認できたが、保存状態が悪いために種類の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹5種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・コウヤマキ・ヒノキ・カヤ）、広葉樹3種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部の幅は不明瞭。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晚材部への移行は比較的緩やかで、晚材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、数珠状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部の幅は広い試料と狭い試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1~5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やか～やや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞が晚材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

勝雄遺跡の樹種同定結果

調査次	登録番号	R番号	出土地区	遺物名	層位	時期	樹種
第2次	6395	148	4 Tre I区	柱	S P02	中世	カヤ
	6396	149	4 Tre I区	礎板	S P04	中世	コウヤマキ
	6397	181	5 Tre B区		S P01	中世	コウヤマキ
第4次	6398	R-1	VI-A	柱材	P008	平安時代前半	スダジイ
	6399	R-2	VI-A	柱材	P032	平安時代前半	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	6400	8008	VII-2	柱痕	S P01	中世	モミ属
第5次	6401		11-E	柱材	P61埋土	鎌倉・室町時代	コウヤマキ
	6402		15-A	柱根材	柱1	鎌倉時代	針葉樹
	6403		15-B	柱根材	柱1	鎌倉時代	マツ属複管束亞属
	6404		6区	柱材	P005埋土	飛鳥時代	カヤ
	6405		11-E	柱材?	P050下層1	中世	モミ属
	6406		11-E	柱材?	P050下層4	中世	モミ属
	6407	21	14-N	栓?	灰色砂礫	中世	ヒノキ
	6408	124	11-C	曲物底板		中世	ヒノキ
	6409	157	11-B・C	漆器片	落ち込み	中世	広葉樹(環孔材)
		101	西調査区A区	柱痕	S P13	中世(13世紀?)	コウヤマキ
第6次		102	3トレンチ	半裁丸木	湿地状堆積層内	中世?	コナラ属アカガシ亜属
		103	3トレンチ	半裁丸木	湿地状堆積層内	中世?	コナラ属アカガシ亜属

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型へヒノキ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁は保存状態が悪いが、対をなせん肥厚がかすかに認められる。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1~2列、孔圈外で急激へやや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~10細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織がある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、孔圈部は疎な3~4列、孔圈外で急激へやや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

4. 考察

出土した木製品は、柱材や礎板などの建築部材が多く、他に曲物底板、栓、漆器片、半裁丸木が認められる。これらの木製品の時期は、主に中世(含鎌倉時代・室町時代)であり、他に平安時代前期と飛鳥時代の柱材が計3点認められる。

柱材の樹種を見ると、飛鳥時代の1点はカヤ、平安時代前半の2点はスダジイとクヌギ節、中世の9点はカヤ、モミ属、コウヤマキ、複管束亞属、ヒノキであった。飛鳥時代と中世の柱材は、種類不明も含めて全て針葉樹材であり、選択的な利用が推定される。一方、平安時代前半の柱材は、2点とも広葉樹材であり、用材選択が異なっている。

確認された針葉樹類は、いずれも大径木になるため、大型建築物などに利用可能である。とくにヒノキは、日本書紀の素戔鳴尊の説話で、宮殿の柱材としての用途が示されており、実際に平城宮などの調査で出土した柱材に多数確認されている（伊東・島地、1979）。したがって、種類構成の違いは、建物の規模、性格等による用材選択の違いを反映している可能性がある。

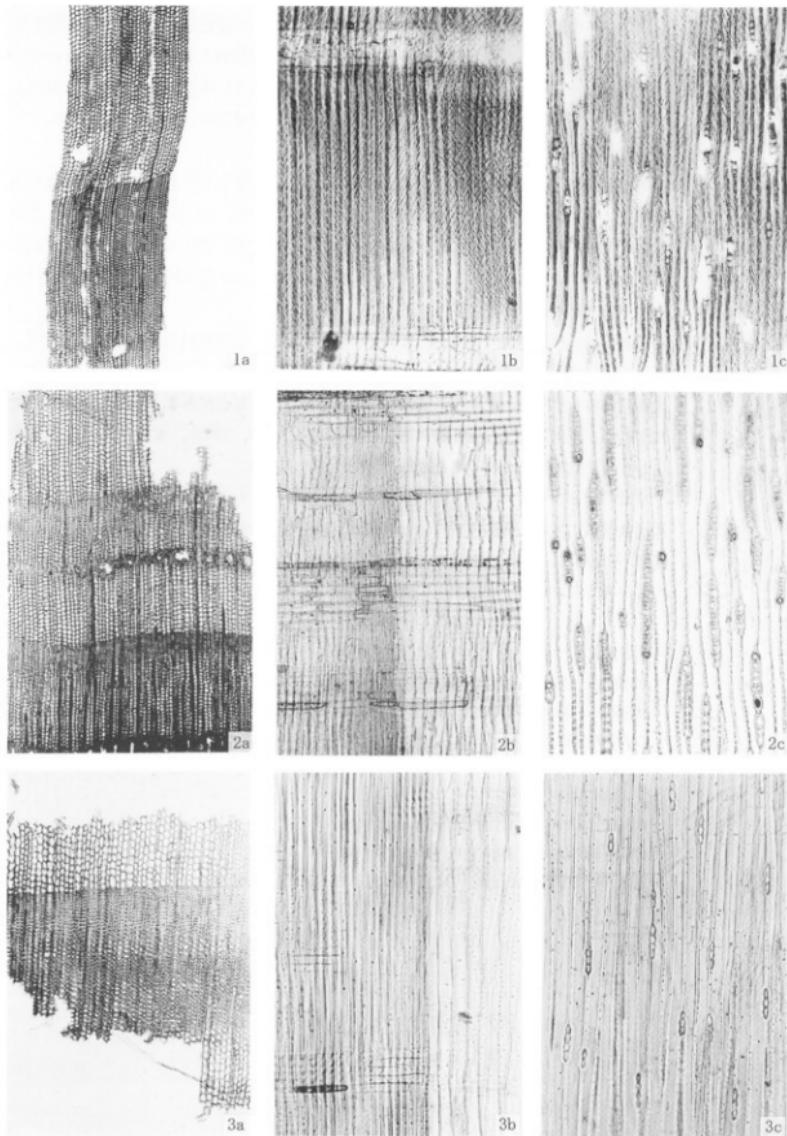
木製品では、曲物底板と栓？が共にヒノキであった。これまでの調査でも、同様の用途にはヒノキなどの針葉樹材が多く認められる（島地・伊東、1988；伊東、1990）。この背景には、ヒノキ材の緻密で弾力があること、割裂性が大きく板状の加工が容易であること、香気があって虫害に強いこと、耐水性・耐湿性に優れること等の材質（成田、1995, 1996）を考慮した用材選択が推定される。

漆器片は、種類不明であるが、環孔材の組織を有する広葉樹材であった。西北遺跡1次調査では、漆碗に同じ環孔材のクリが確認されている。漆碗の木地に利用する環孔材には、クリの他にもケヤキ、トネリコ属、ハリギリ、ヤマグワなどがある。全般的に、堅硬で韌性があり、民俗事例では薄手物に適するとされる（橋本、1979）。本遺跡でも環孔材を利用した薄手物の漆器が利用されていた可能性がある。

半裁丸木は、いずれもアカガシ亜属であった。アカガシ亜属は、農具などの素材として重要な種類である。今回の試料については、用途などの詳細が不明であるが、湿地状堆積層内から出土していることを考慮すると、利用するために伐採した木材を貯木していたこと等が考えられる。

引用文献

- 橋本鉄男（1979）『ろくろ』p.444、法政大学出版局。
 伊東隆大（1990）『日本の遺跡から出土した木材とその樹種Ⅱ』木材研究・資料、26、p.91-189、京都大学木材研究所。
 伊東隆大・島地謙（1979）『古代における延造物柱材の使用樹種』木材研究資料、14、p.49-76、京都大学木材研究所。
 成田壽一郎（1995）『木工指物』p.174、理工学社。
 成田壽一郎（1996）『曲物・輪物』p.205、理工学社。
 島地謙・伊東隆大編（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』p.296、雄山閣。



1.マツ属復総管束亞属 (W6403)

2.モミ属 (W6400)

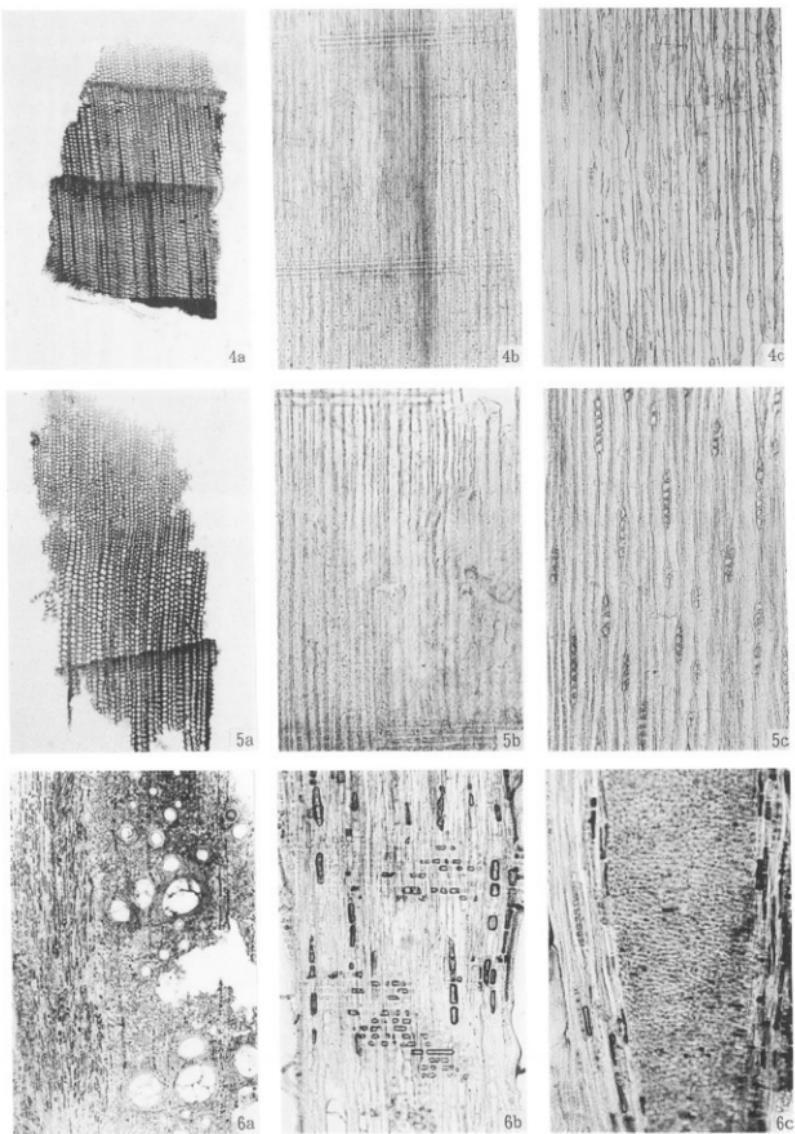
3.コウヤマキ (W6401)

a : 木口, b : 横目, c : 板目

fig. 511 勝雄遺跡第4・5次調査出土木材樹種

200 μm : a

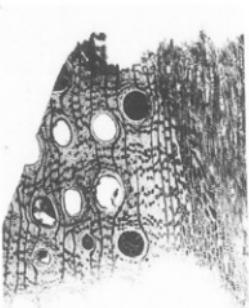
200 μm : b, c



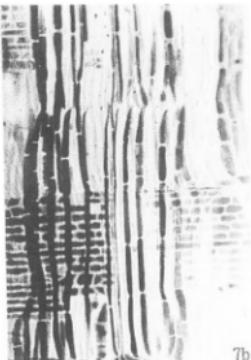
4.ヒノキ (W6408)
5.カヤ (W6395)
6.コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (W6399)
a:木口, b:径目, c:板目

fig. 512 勝塙遺跡第2・4・5次調査出土木材樹種

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b, c



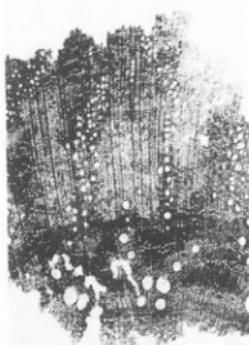
7a



7b



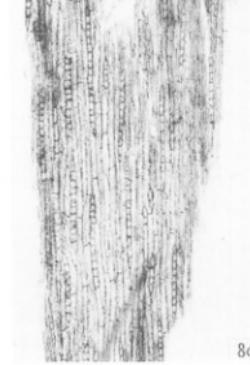
7c



8a



8b



8c

7.コナラ属アカガシ亜属 (R102)

8.スダジイ (W6390)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m : a200 μ m : b, c

fig. 513 勝雄遺跡第4・6次調査出土木材樹種

ながたじんじやけいだい 12. 長田神社境内遺跡 第13次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、六甲山南麓の西端に位置し、茹藻川の形成した標高14m付近の扇状地に立地している。

これまでの調査では、縄文時代晚期から中世にかけての遺構を確認している。特に、弥生時代後期から庄内期にかけての竪穴住居等が多数検出しており、なかには大型の住居も含まれていることから、付近に存在する神楽遺跡・上沢遺跡とともに当該時期の中核遺跡と考えられている。また、現在の茹藻川は付け替えられたものであるため、以前は異なった場所を流れしており、これまでの調査においても旧河道等を確認している。



- II 区** 挖削深度1m前後まで地盤改良が及んでいたため、遺構面はすでに削平されており、遺構・遺物は確認できなかった。なお、調査区の西半には人頭大前後の花崗岩礫を自然木杭材と横木で護岸している近世以降の溝状遺構がある。
- III 区** 最も北側に位置する調査区で、淡黄色シルト質極細砂を基盤層とする明確な遺構面を確認し、方形竪穴住居1棟とピット2基を検出した。
- S B01** 調査区のはば全域を占めるように検出した竪穴住居で、北側周壁と南側周壁を確認しており、南北長約7.5mの方形の住居と推定できる。また、中央土坑の位置や周壁の状況から復元すると、東西長は約11mと推定される。
- 周壁に沿って幅1～2m、高さ約5～8cmのベッド状遺構が造り付けられており、北側周壁沿いには幅10cmの周壁溝も巡っている。床面では周堤が巡る中央土坑と主柱穴1基が確認でき、完形品の壺・鉢を含む多量の弥生土器が出土している。なお、床面直上では、炭化材が多量に確認されており、焼失住居と考えられる。なお床面の標高は13.9mである。
- 中央土坑は直径約40cm、深さ55cmで、埋土は炭と弥生土器片を多量に含む暗灰色極細砂質シルトである。周囲には中央土坑を中心として直径約2mで、幅30～40cm、高さ3～4cmの周堤が巡っており、被熱を受けた台石も据えられている。
- 主柱穴は直径15cm、深さ50cmの暗灰色～暗褐色シルトの柱痕に梢円形の掘形をもつ。これが南東隅の主柱穴と推定でき、主柱は4本柱で構成されていたと考えられる。
- S P01** 暗褐色極細砂質シルトを埋土とする直径50cm、深さ5cmの円形のピットで、弥生土器片が出土している。
- S P02** 焼土塊を含む灰色シルト質細砂を埋土とする梢円形の2段掘りのピットで、深さ15cmである。土師器片が出土しているが、時期は不明である。



fig. 515 S B01

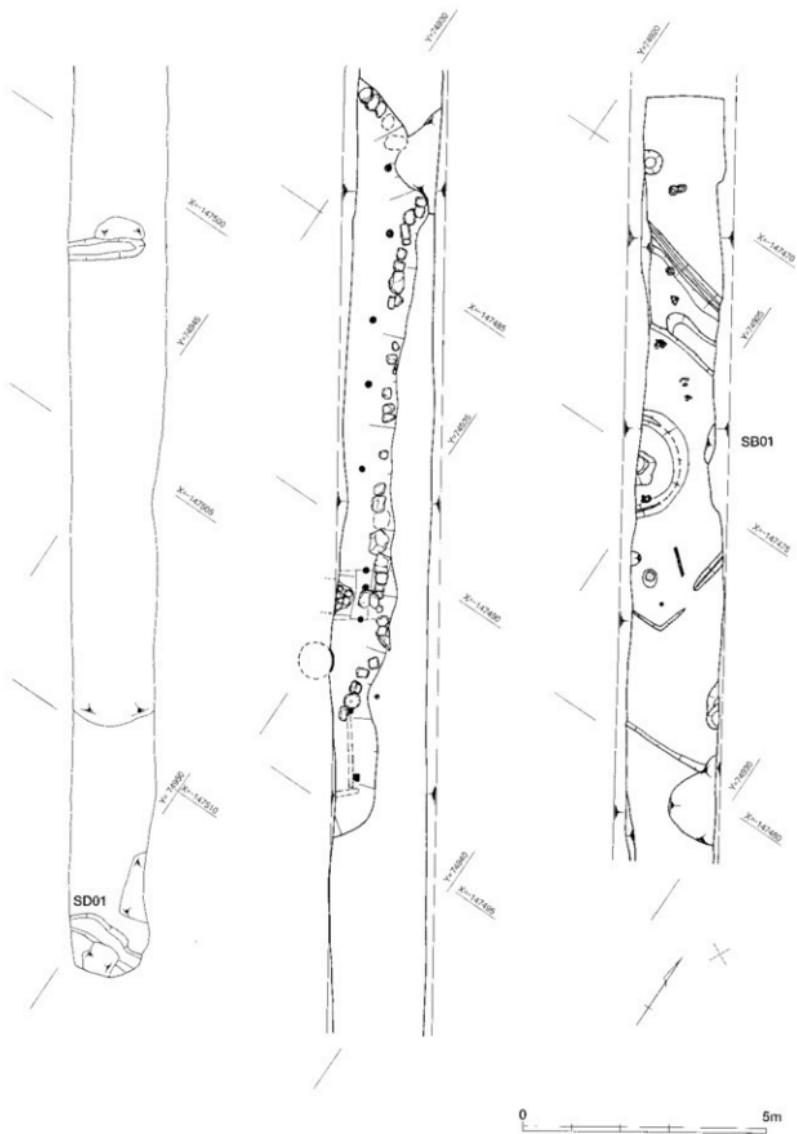


fig. 516 調査区平面図

3. ま と め Ⅲ区のS B01からは、まとめた量の弥生土器が出土しており、また出土位置も床面直上と考えられることから、弥生時代後期末のこの地域の集落を考える良好な資料が提示できたといえよう。特に今回の調査地のすぐ西からも、数棟の竪穴住居が確認されていることから、刈藻川によって形成された微高地に集落が営まれていたといえる。

今回の調査は雨水幹線築造に伴う発掘調査で、日数的にも制約をうけた調査であり、十分な体制を組むことができなかった。このような状況の中、S B01が調査区内で平面形態・規模が判明できる状態で検出されたことは、包蔵地内の発掘調査の必要性が改めて認識されるものである。



fig. 517 S B01遺物出土状況



fig. 518 S B01中央土坑



fig. 519 出土遺物実測図

おおてちょう 13. 大手町遺跡 第5次調査

1. はじめに

大手町遺跡は、六甲山系から派生する妙法寺川などの河川により形成された、南北に長い微高地上に立地する。

これまでの調査では、縄文時代晚期から近世までの遺構・遺物を確認している。近年の擾乱のために遺構の残存状態は悪いものの、弥生時代の堅穴住居・溝、中世の土坑、飛鳥時代の溝、江戸時代の庄屋敷やそれに伴う園池・水琴窟などの遺構を検出している。

周辺には、各時代の遺跡が密集して存在するが、特に戎町遺跡は、大手町遺跡においては明らかではない弥生時代前期から中期初頭までの遺構を確認しており、両遺跡の関連が注目されるところである。

大手町遺跡は、平成7年度都市計画道路山麓線代替地宅地造成に伴う試掘で発見され、同年7月に第1次調査を実施している。また同年平成7年11月、山麓線建設予定地で試掘を実施し、2ヶ所で遺物包含層を確認した。試掘調査の結果埋蔵文化財が確認された地区的うち、平成8年度に東部分の調査を実施したが、平成11年度は西側部分のうち既設建造物の餘却が完了した部分について調査を実施した。



fig. 520
調査位置図
1 : 2,500

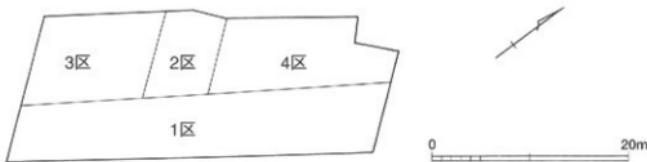


fig. 521
調査区割図

2. 調査の概要 全長約36m、幅15mの調査対象地を南側半分を1区、北側を西から3区・2区・4区として調査を実施した。

基本層序 現地表面より下層は、①盛土・②茶灰色粗砂（旧耕土）・③黒色シルト質極細砂（古墳時代遺物包含層）・④暗灰褐色シルト質極細砂（弥生時代遺物包含層）・⑤茶黄灰褐色シルト質極細砂（弥生時代中期から後期遺構面基盤層）の順で堆積している。

現地表面から③層上面までは0.7m、⑤層上面までは1mである。

検出遺構 1区では、弥生時代後期後半から末の竪穴住居2棟、古墳時代後期の掘立柱建物1棟、弥生時代中期の土坑3基、弥生時代中期の溝1条などを検出した。また3区では、弥生時代中期の土坑1基・古墳時代後期以降の溝2条を検出した。

一方、2区・4区においては、4区で近世・近代の耕作に伴う溝状の落ち込みを検出したのみで、擾乱により大半が削平されており、遺構は確認していない。

S B01 1区南東隅で検出した、1辺4.5m、深さ0.5mの方形の竪穴住居である。調査区外へ延びており、約半分を確認したに止まった。床面では、幅0.2m、深さ0.15mの周壁溝が巡り、6基のピットを検出した。ピットは何れも明確な柱痕跡を確認していないため、主柱穴とは考えにくい。

埋土最上層からは弥生時代後期後半から末期の壺、甕、高杯、鉢などが大量に出土した。東端では複数の甕がまとめて置かれたような状況で出土し、さらにその付近から抽象的な絵画を描いた鉢や手焙形土器が出土した。北東隅では、拳大の河原石が並べ置かれていた。

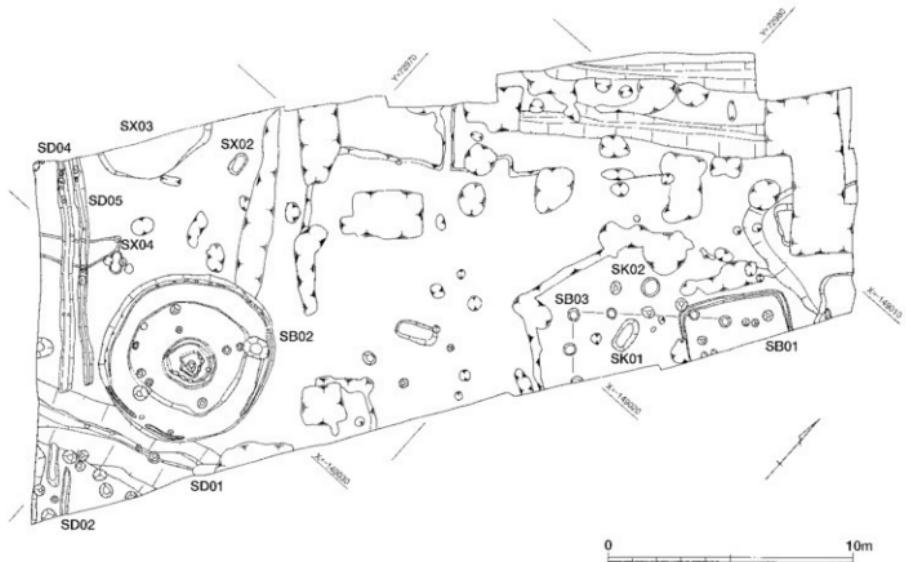


fig. 522 調査区平面図

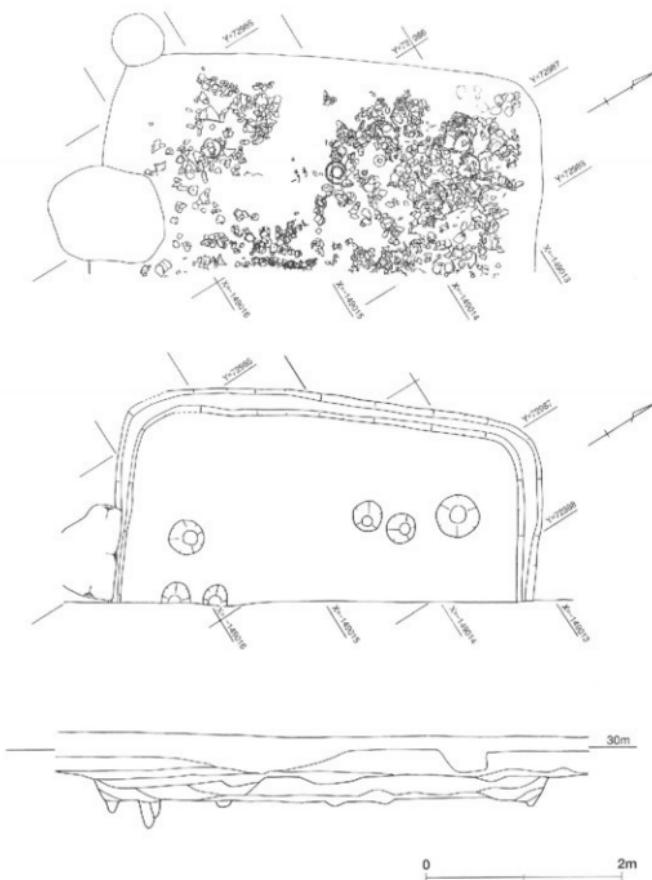


fig. 523
S B01平・断面図

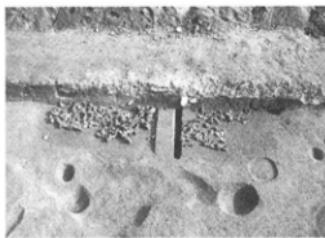


fig. 524 S B01



fig. 525 S B01

S B02 1区西端と3区にまたがる部分で検出した遺構で、直径7m、深さ0.2~0.6mの円形の竪穴住居である。主柱は4本柱で、直径0.6m、深さ0.5m程度の中央土坑があり、底付近では柱痕跡状を呈し、中央土坑の周りには土手状の高まりを確認した。埋土には炭を若干含んでいる。

周壁溝は、幅約0.15m、深さ0.2mの規模で、溝内に直径0.1m前後、深さ0.2mの、等間隔に並ぶビットを検出した。溝埋土からは、鉄製刀子が1点出土している。

また、幅約1m、高さ約0.1m程度のベッド状遺構が検出している。南西部では不明瞭ではあるが、全周していたものと考えられる。

貯蔵穴は2基検出しており、1基は東側のベッド状遺構を切って穿たれたもので、直径0.6m、深さ0.3mの規模である。内部からは少量の弥生土器が出土した。もう1基は西側で検出したもので、直径0.4m、深さ0.3mの規模である。内部からは、弥生土器がややまとまって出土した。

住居埋土からは、大量の弥生時代後期後半から末期の土器のほかに、婧壺が2個体完形で出土している。また、内区からは、甕・手捻形土器が床面から原位置を留めて出土し、柱穴からは、ほぼ完形の小型甕が1点出土している。

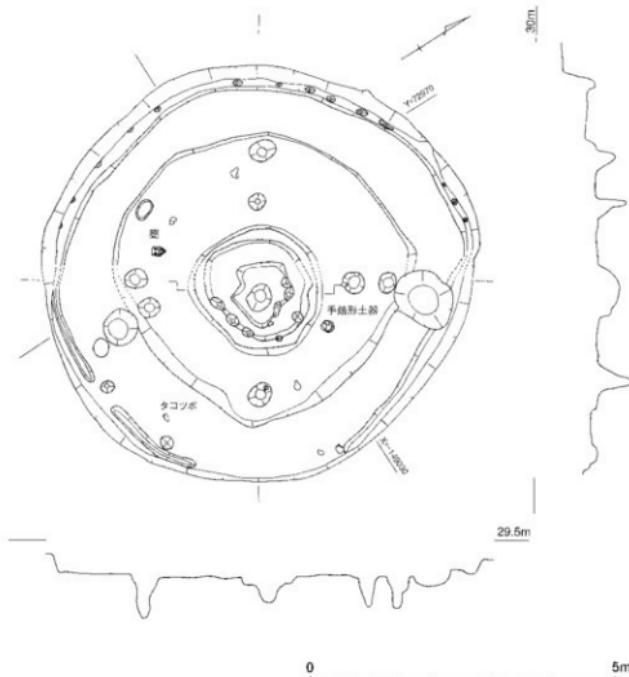


fig. 526
S B02平・断面図

- S B03 1区東で検出した、2間以上×4間以上の掘立柱建物である。柱穴は直径0.3m前後、深さ0.3~0.4mの規模である。柱穴から、古墳時代後期の壺蓋が1点出土している。
- S D01 1区南西隅においてS B02に切られる状況で検出した、幅2m前後、深さ1.5mを測るV字溝である。埋土は大きく4層に分かれ、下層から弥生時代中期の壺や甕が大量に出土している。最下層は土器をあまり含まず、地山と同様の土壤であるため、肩崩れによる堆積と考えられる。また溝に伴う土手などは検出していない。
- S D02~05 1区から3区にかけて検出した溝で、幅0.3m前後、検出長15m前後を測る。S D02とS D04、S D03とS D05がそれぞれ繋がるようである。各溝からは須恵器・土師器小片が出土している。
- S X01 1区中央で検出した平面形が長方形の土坑で、長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.4mを測る。弥生時代中期の甕・壺などの土器がまとめて出土している。形状から、墓である可能性が考えられる。
- S X02 3区北東隅で検出した平面形が楕円形の土坑で、長軸1m、短軸0.6mを測る。弥生時代中期の甕・壺の破片がまとめて出土している。1個体に復元できるようなものはない。



fig. 527 S B02



fig. 528 S B02遺物出土状況



fig. 529 S B03



fig. 530 S X01



fig. 531 S D01



fig. 532 S D01

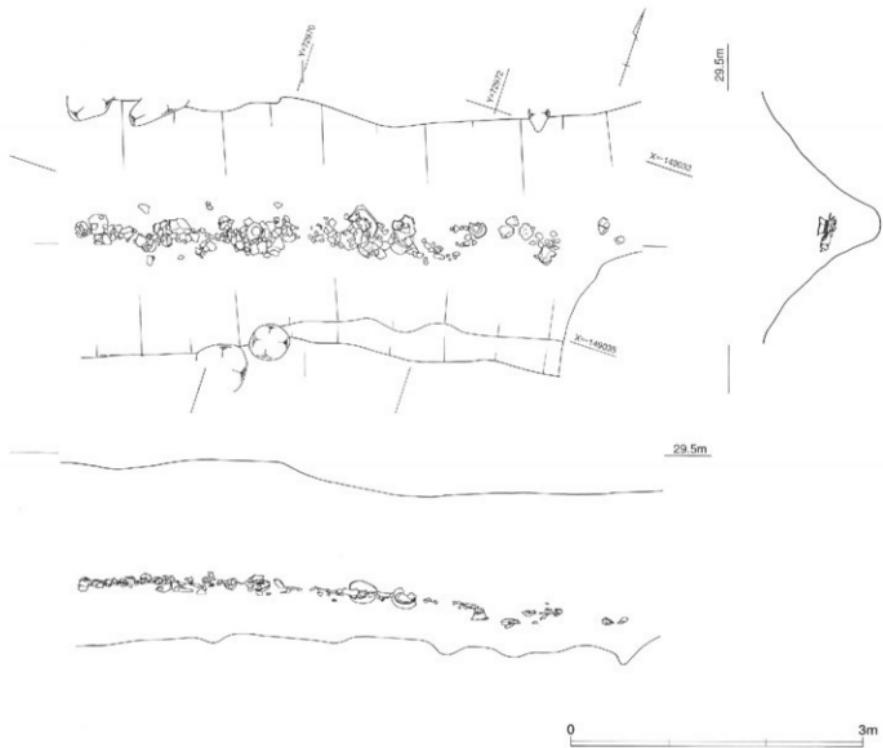


fig. 533 S D01平・断面図

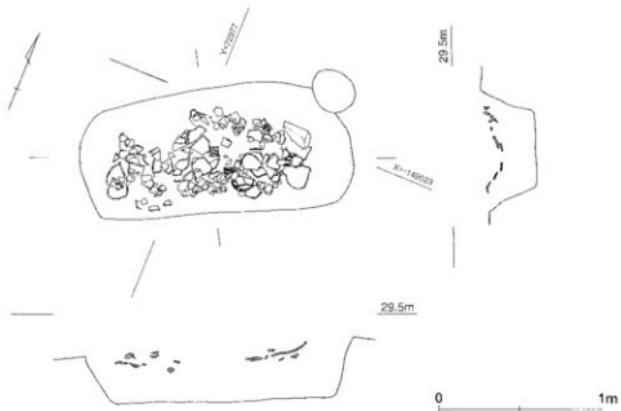


fig. 534
S X01平・断面図

- S K01** 1区東で検出した平面形が楕円形の土坑で、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ約0.2mを測る。断面形は皿状で、弥生時代中期の土器が出土している。
- S K02** 1区東で検出した平面形が楕円形の土坑で、直径0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は2層に分かれ、上層から弥生時代中期の土器が出土している。
- ピット** ピットは20数基検出しているが、柱穴は10基足らずで、ほとんどが浅い窪み状である。柱穴は、直径0.2~0.3m、深さ0.5m前後の規模で、明瞭に柱痕跡が確認できる。しかしピットは散在しており、建物としてのまとまりは認められない。

出土遺物 弥生時代中期の土器・鉄製品・石斧・石鎌・石錐、弥生時代後期後半から末期の土器、須恵器・土師器など多くの遺物が出土している。特にS B01上層の土器群は一括性が高く、弥生時代後期後半から末期の土器様相を明らかにする上で重要な資料である。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半から末期の竪穴住居を2棟検出し、当時の集落の様相の一端が明らかになった。

S B01から出土した大量の弥生時代末期から古墳時代初頭の土器には、手焙り形土器・絵画土器などの特殊な土器が出土したことに加え、甕を集めたような状況が観察できるなどから、何らかの祭祀行為を行った可能性が高い。

またS B02は遺存状態がよく、ベッド状遺構や中央土坑の土手などが比較的良好な状態で検出された。ベッド状遺構の上面からは遺物は出土せず、内区で完形の手焙形土器・甕が出土しており、物置として使用されず、ベッド状遺構の用途を考える上で重要である。以上2棟の住居は、土器の出土層位からS B01の方が若干早く築かれたものと考えられる。

弥生時代中期の遺構は溝と土坑を検出したが、そのうちS D01は、規模の点から環濠の一部と考えられる。今回も含めこれまでの調査では、当該期の住居等は確認していないが、今後の調査で検出される可能性は十分に考えられる。

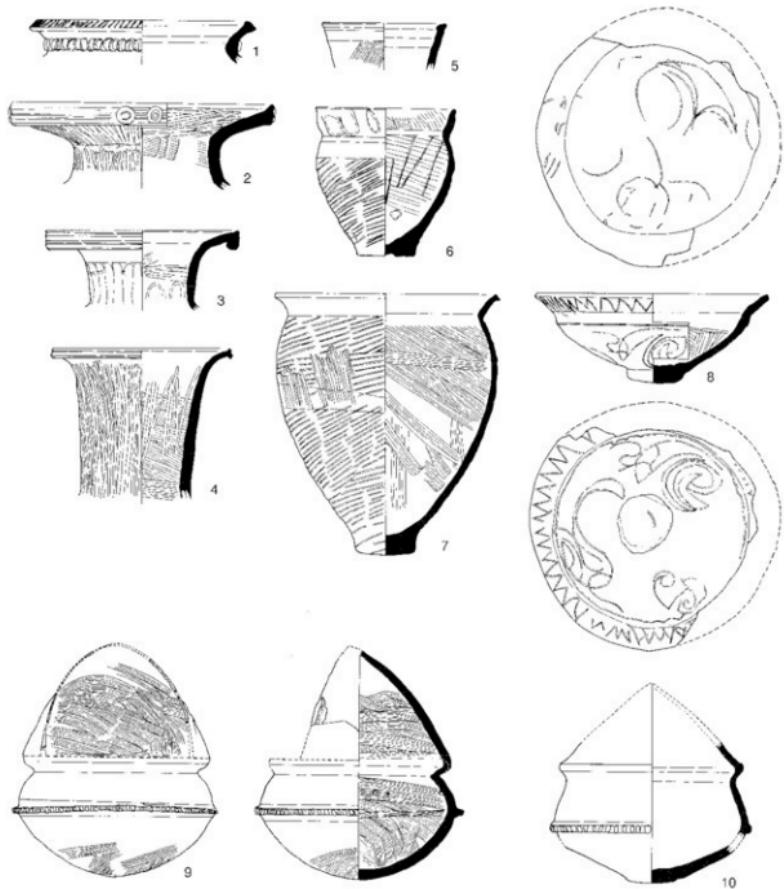


fig. 535 出土遺物実測図

じょうがたにとりで 14. 城ヶ谷砦 第1次調査

1. はじめに

城ヶ谷砦は、櫛谷川上流域左岸に位置し、東西に連なる丘陵から西へ張り出す尾根上に立地する。調査地の現標高は約89mで、北、西、南は急斜面となっている。また櫛谷川沿いの街道と福谷から高和に通じる街道が交差する付近にあり、交通の要所に位置している。

櫛谷町寺谷には、神戸市内においても遺存状況が極めて良好で、中世における城郭構造を伝える貴重な城址である端谷城址の存在が知られている。

これまでの調査研究により、端谷城には防衛線ともいえる複数の出城の存在が考えられている。今回の調査地点にも、出城の一つである城ヶ谷砦が存在すると推定されてきた。

この度当該地において道路建設に伴う切土工事が計画され、平成11年6月に試掘調査を実施した結果、柱穴・土坑などを確認し、中世の土器が出土した。同時に調査地点及び周辺地について踏査を実施した結果、土塁、堀切りや土橋状の遺構などを確認した。

試掘調査の結果を受けて、切土工事により影響を受ける部分について、調査を実施した。

なお後述する堀切りについては、今回の本調査（第1次調査）段階においては、工事影響深度の関係上掘削を中層で止めた。しかし、砦の機能を考える上で、堀切りは土塁とともに重要な防衛線の一つであり、その深さや形状は防衛機能に直結する重要な要素である。また最深部から出土する遺物は、堀切りの時期を考える上で重要となる。以上の理由から堀切り下層の調査が必要と判断し、トレーンチを設定して、下層の確認調査を実施した。

ここでは、第1次調査の概要に加え、堀切り下層の確認調査の結果も合わせて記述する。



2. 調査の概要　調査地は、戦後すぐは畠であったらしいが現況では竹林となっている。表土の下層は、浅黄色細砂質土を挟んで直ぐに遺構面である地山面となる。遺物包含層は存在しない。なお、曲輪である平坦部は、4分割して遺物の取り上げに便宜を図った。

以下、曲輪、堀切り、土橋について略述する。

曲輪　曲輪は東から西へ緩く傾斜している。縁辺部は傾斜が急となり、表土の下層にもう一層、淡茶褐色砂質土が挟まれる。遺構面は黄褐色土であるが、本来の地山とは異なり二次堆積の土層と思われる。土坑、溝、ピットなどの遺構を検出した。現状での曲輪の面積は、約494m²である。

SD01　曲輪西半で検出した逆し字状に回る溝である。幅は約1.4m、深さ約40cmを測る。両端は斜面部に達しておらず、収束する。このことから、排水機能をもつものではなく、区画を目的とする遺構であると考えられる。

埋土は灰黄色砂質土で、コーナー付近のやや北側より土師器鍋片が出土している。時期は、14～15世紀と考えられる。また、それより北側から、土師器小皿が2枚正位置で出土した。ほかに14世紀代と考えられる須恵器鉢の口縁部片が出土している。





fig. 538 曲輪西半



fig. 539 曲輪北半

S K01 曲輪北側で検出した、平面形が楕円形の土坑である。長径約1.8m、短径約1.6m、深さ約35cmである。埋土は浅黄色砂質土～灰黄色砂質土である。遺物は上層から、土師器小皿、須恵器などが出土した。

ピット ピットは、曲輪中央と、S D01で区画された内部で比較的集中して検出した。S D01の東側で南北方向の柵列と、S D01北端東側で楕状の1間×1間の柱穴群を検出したが、それ以外は建物として復元できなかった。ただし、単なる杭跡とは考えられないピットも存在することから、何らかの建物が存在したと考えられる。

fig. 540
S X01平・断面図

S X01 曲輪北東部で検出した落ち込みで、長径約4.7m、短径約3.6m、深さ約30cmを測る。埋土は炭・焼土混じりの褐色砂質土である。

遺物は、陶器甕、須恵器甕、土師器小皿、石鍋などのほか、金属器も出土した。出土の傾向は、陶器は西側に多く、須恵器は北東側に多い。土師器小皿は南西側と北側に集中し、法量の異なる皿を何枚か重ねた状態で出土した。また焼土は東南・東側に集中している。

S X04 曲輪南西部で検出した。南半は、崩落により失われており全容は不明であるが、短径約3mの平面形が梢円形を呈するものと思われる。深さ約50cmを測る。

埋土は焼土を多く含む褐色砂質土で、須恵器片や土師器小皿などが出されている。

S X05 曲輪西半のS D01コーナー内側で検出した。長径約2.3m、短径約2m、深さ約50cmである。埋土はにびい黄色シルト質土で、特に最下層から土師器、須恵器が多く出土した。

堀切り 東側の曲輪と隔離するように、尾根を切断して造られている。曲輪東端からの幅は約12m以上を測る。

工事影響範囲の関係上、完掘には至らなかったが、堀底の確認のため3本のトレーニチを設定して下層の確認調査を実施した。



fig. 541 S X01



fig. 542 土橋

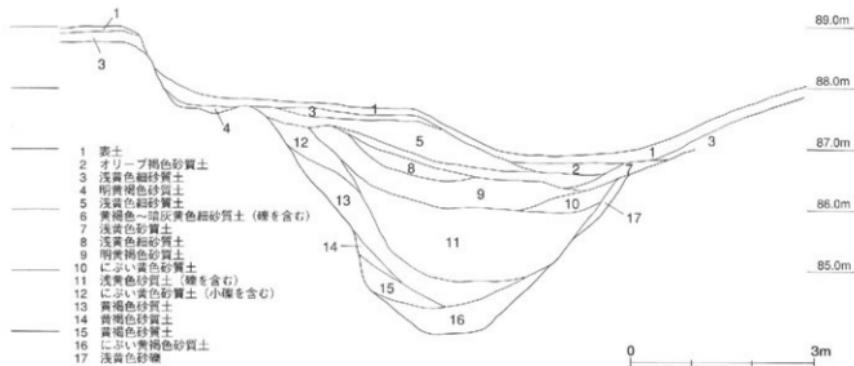


fig. 543 堀切り断面図

下層 底にやや平らな部分も存在するが、断面形は基本的にV字形である。壁面は若干の凹凸（確認調査）はあるが、傾斜は約45度と急である。また北トレントと土橋直北の南トレントでは、西側斜面部の底から1m付近に段が形成されていた。西側平坦面からの深さは、約5mである。

埋土は大きく3層に分層可能である。上層は1～7層までで、中層（8～11層）は、堆積状況から堀切りが掘り直された後の埋土と思われる。12層以下が下層である。

遺物は、上層から陶磁器・土師器、中層からは陶器片、土師器片また、黄褐色砂質土からは須恵器、土師器、陶器が出土している。

土橋 曲輪南東隅に位置しており、さらに東側の土塁で閉まれた曲輪へと続く。堀切りに直交するように盛土を施して造作している。上端部分は長さ約7m、幅約1m前後で、直径5～15cm大の円礫を敷いている。上端は西半ではほぼ水平であるが、中央以東は東側曲輪にむかって上っていく。堀切り底からの高さは約3mを測る。

遺物は、上端の隙間から陶器擂鉢口縁片が出土した。口縁の形態から、16世紀前半のものと考えられる。土橋盛土内からは、陶器、須恵器、土師器が若干出土している。

出土遺物 陶器、須恵器、土師器などが出土しているが、大半が遺構からの出土である。特にSX01からは14世紀後半から15世紀代と考えられる遺物が多く出土している。その他に、釘と考えられる鉄器が数点出土している。

また、時代は大きく異なるが、曲輪西端で遺構面精査中にサヌカイト片が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、曲輪と堀切り、土橋などを確認した。

曲輪で検出したピット群は、明確な建物の復元には至らなかったが、その存在を窺わせるもので、焼土が出土していることから、壁土を使った建物を想定できる。瓦は出土していないため、建物は瓦葺きではなく、板葺きあるいは茅葺きであったと考えられる。



fig. 544
堀切り断面

堀切りについては、部分的ではあるが当初の姿が明らかになった。現状でも5mの深さを測るが、曲輪部分に土塁の存在を想定すれば、さらに深さを増し、この深さと傾斜角度から判断すれば、敵にとっては攻め難いものといえる。

堀切りには大量の土砂が埋まっていたが、土砂の流入方向からみれば、西側平坦面側より埋められたと考えられる。最下層からの遺物の出土はなかったが、中層に中世の遺物を含んでおり、近世にはほぼ現状に近い状態まで埋没していたものと考えられる。

土橋は、出土土器などから判断すると、堀切り修築後のものと考えられる。現在、曲輪南側に土橋につながる道が存在するが、この道が当時からのものかは確認できなかった。また、曲輪への入口がどこに存在するのかは不明確である。

遺物からみると、2時期の遺物が出土しており、この砦は14世紀代に築造されて16世紀代に改修が行われたことが想定できる。特に、S X01出土の甕は、砦を防御に当たる側の水・食糧を備蓄するために重要なものであったと考えられる。

その一方で、武器・武具類は全く出土していないため、戦闘あるいは防御の実像に迫る直接の資料が不足することは否めない。

城ヶ谷砦の本拠地と考えられる、端谷城の築かれた時期については現在のところ明確ではないが、城主であった衣笠氏が鎌倉時代中頃には榎谷の地を治めていたことが文献から窺うことができる。のことから、衣笠氏の勢力の広がりとともに、榎谷の地に城ヶ谷砦をはじめとして城が築かれていったものと考えられる。

その後、衣笠氏は天正6年（1578）に始まった三木合戦で別所方として活躍したが、織田方の攻撃で1580年に落城したと考えられている。

そして城ヶ谷砦も、端谷城と一緒に落城したのではないかと推定されるだけである。

今回は、城ヶ谷砦のごく一部の調査であったが、周辺地域には調査地より規模の大きい曲輪や堀切りが存在しており、今後の調査・研究に課題と期待がもたれる。



fig. 545
調査地遠景

かんで 15. 神出古窯址群

1. はじめに

神出古窯址群は、離岡山と雄岡山の裾野に広がる平安時代後半から鎌倉時代にかけての須恵器の窯址として知られている。これまでの調査で、窯址、粘土採掘坑や生産に関係すると考えられる建物址を確認している。

今回、個人住宅建設に伴って試掘調査を実施した結果、中世の遺物と遺構面を確認したため、建築工事の影響の及ぶ範囲を対象として発掘調査を実施した。

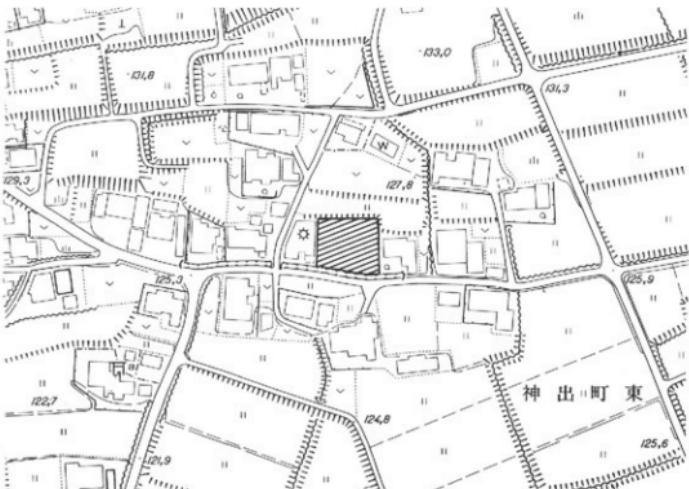


fig. 547 調査範囲位置図

2. 調査の概要 今回の調査は、新築される建物の基礎部分のみの調査であるため、幅60cmのトレンチを設定して調査を実施した。

基本層序 基本層序は、現地表面下40cmまでは旧耕土が堆積しており、その直下で黄褐色粘土の地表面を検出した。この地山上面が遺構面となっている。

検出遺構 遺構は、第1・2・4・5・7トレンチでそれぞれ検出した。

第1・2トレンチでは、南北約3m、東西約6mの大きな落ち込みを検出した。この落ち込みは、東西の両肩が階段状に段が造りだされていた。南北の両肩は、それぞれ急激に落ちる肩になっており、人間の昇り降りが困難である。落ち込みは、遺構面から約1mの深さまで掘り込まれている。遺物は出土しなかった。第4トレンチでも東肩にあたる落ち込みの肩を検出した。この肩も階段状を呈している。第5トレンチでは、浅い落ち込みを検出した。この落ち込みの底部では、不規則な窪みが検出された。

3. まとめ 調査の結果、大小の落ち込みを検出した。これらの落ち込みは、形状から須恵器の材料となる粘土を探るための粘土採掘坑と考えられる。

第6トレンチ

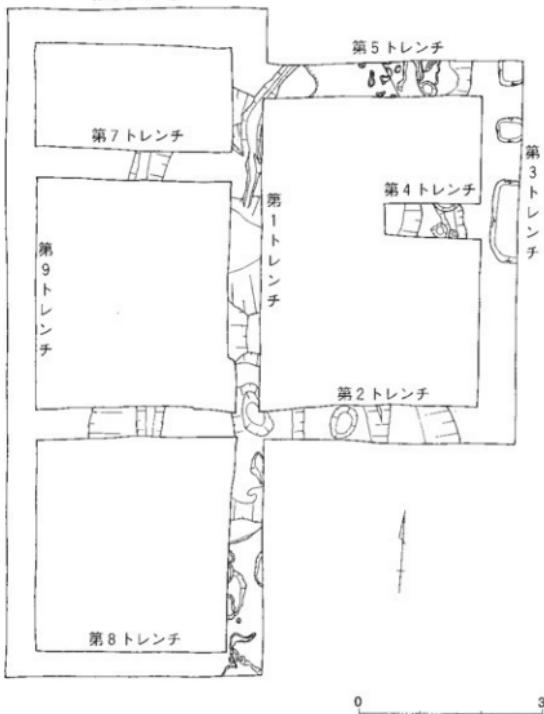


fig. 549
調査区平面図

かん ぶう 16. 寒鳳遺跡 第6次調査

1. はじめに

寒鳳遺跡は、明石川の支流伊川と明石川の合流点の東側の、伊川に面する台地上に立地する。平成7年に住宅建設に伴って第1次調査を実施し、さらに平成8・10年には遺跡を東西に横切る都市計画道路予定地について調査を実施した。その結果、古墳時代中期から後期、平安時代前期の集落跡などを検出し、古墳時代においては、伊川谷地域での中心的な集落であることが次第に明らかになってきた。

今回の調査は、平成8・10年に実施した都市計画道路玉津鳥羽線街路の北側部分において、街路の切下げによって生じた段差を緩和するため、耕地への進入路を造成する工事に伴い実施した。

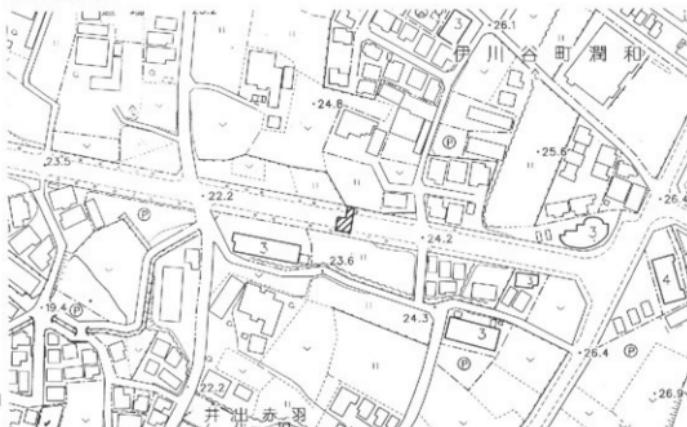


fig. 550
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査地は2枚の耕作地にまたがっており、現状では東側の耕作地が一段高く、中央に畦畝が存在する。西側の低い耕作地においては床土直下で地山（黄褐色礫混じり粘質土）となって、その上面で柱穴を検出した。一方東側では、南部で古墳時代の須恵器・土師器を多量に含む堆積がみられ、上面を精査した結果、竪穴住居の埋土であることが判明した。竪穴の北側では、床土直下で地山となり、方形掘形の柱穴、L字形の溝などを検出した。

S B01

竪穴住居S B01は、西側を畦畝によって削平され、壁体・床を壊滅されていたが、西辺沿いの支柱と考えられる柱穴を検出したことによって規模を推定した。推定される住居の規模は、一辺が6.4mである。北・東辺には幅22cm前後の周壁溝を巡らせ、床面は10cm前後の貼床を施す。床面上で須恵器・土師器片を検出した。

S B01の南側の貼り床下で、周壁溝状の溝および段落ちを検出した。下層の竪穴住居の痕跡と考えられるが詳細は不明である。

S D01

S B01の北東側、ほぼS B01に平行して掘られた溝S D01を検出した。幅60cm、深さ10cm前後の断面U字形の溝である。埋土内からは須恵器・土師器片が出土した。

ピット 柱穴と考えられるピットを24基検出したが、調査区が限定されているため建物としてはまとまらなかった。調査区の北東部で検出した柱穴は、何れも掘形が大型方形で、埋土内から須恵器片が出土している。

3. まとめ 今回の調査では、堅穴住居1棟を検出した。図上における検討の結果、第2次調査におけるSB12の北側部分を検出したと考えられる。

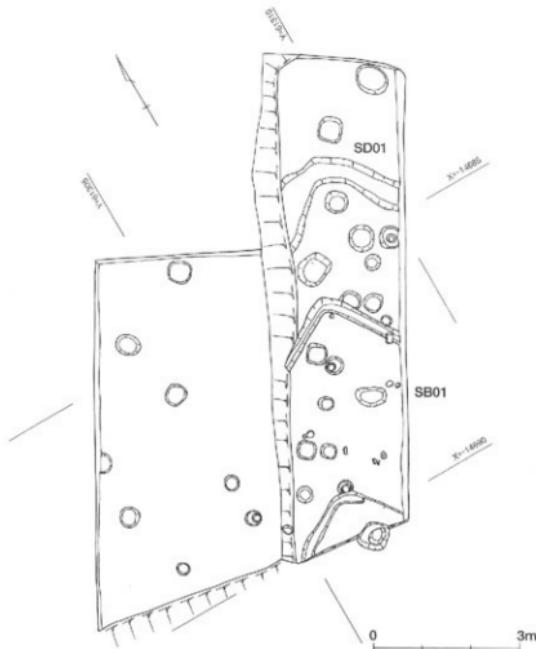


fig. 552 調査区全景



fig. 553 SB01

しん ぱう 遺 跡

17. 新方遺跡

1. はじめに

新方遺跡は、明石川とその支流である伊川が合流する地点の北側に広がる遺跡である。両河川によって形成された沖積地上で、弥生時代から近世に至る遺構を確認している。

近年の調査では明石川左岸、遺跡の南西部に位置する野手・西方地区において、弥生時代前期前半の溝状遺構内で人骨を複数検出している。これらの人骨は、縄文的な骨格をしていることと、石鎚が刺さった状態から、畿内最古の弥生戦士として注目された。

今回の調査は、工場の増設工事に伴って試掘調査を実施した結果、古墳時代の遺物を確認したため、建築工事の影響を及ぼす範囲を対象として発掘調査を実施したものである。

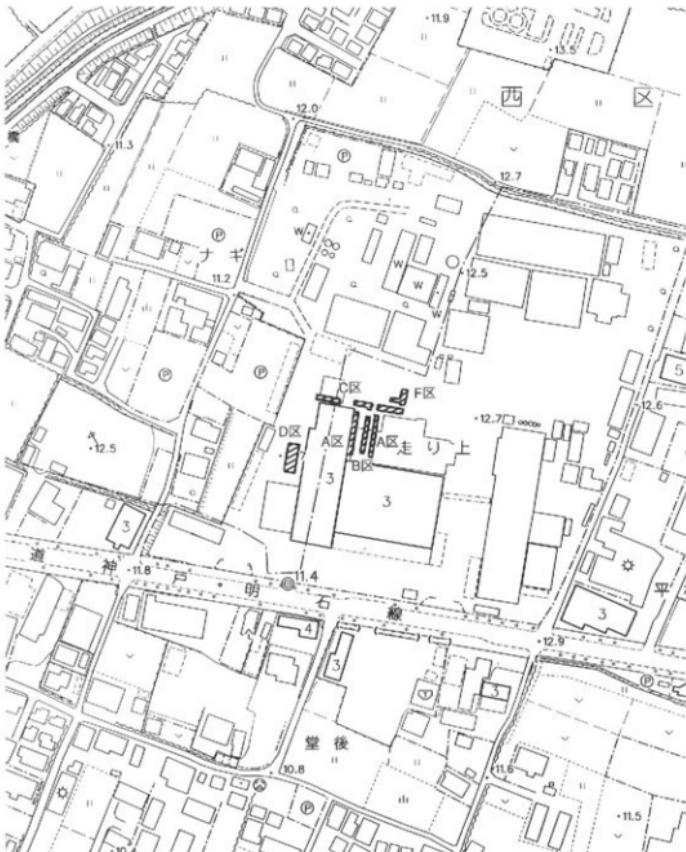


fig. 554
調査地位図
1 : 2,500